

504
222

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸ 11 12 13 14 15

始



15.5. 12

504-222

新しき生命の歡び

倉長巍著

警醒社書店

大正
12. 8. 1
内交

はしがき

神、自然、世界及び人生等に關する問題は、永遠に亘る大問題である。殊に歐洲大戰以來、人類は一層人生問題について悩みを懷いてゐる。余は未だ是等の大問題に關して十分悟得し、豁然として自ら眞理の源頭に到達せる者に非ざるも、しかも日頃是等の問題の解決に力めてゐる。

此書は組織を立てて稿を起したるものにあらず。今回知人等のすゝむるに従ひ、最近余の主宰する『教界時報』既載のうちより、少しく進んだ求道者並に一般信徒の信仰修養の一助となるべき文章を擇び集め、往年、出せる『人生の慰藉』の姉妹篇たる意義を以て公にする。當時は日露戦争終熄の後とて、我同胞は一般に慰藉を切望する折柄なりしが、刻下は新らしき生命の發展を希求する際なるを以て、斯くのごとく題した。

江湖の讀者、此杜撰なる一書によりて聊かなりとも、心靈修養の資を獲らるる所あらば、著者の本懐之に過ぐるものはない。

大正十二年六月

教界時報編輯室にて

著者

目次

春に酔ふも神を頌へ能はざるか……………一

神及び自然……………一〇

神の聖姿……………二七

天地無限の神愛を悟れ……………三七

神の最高啓示……………四七

詩人に映れる基督の幻象……………五九

沙翁とイエス……………七一

イエスの創造力……………八五

汝等は我を誰と言ふか……………九六

現代のキリスト……………一〇六

目次

一

甦へれる耶蘇の姿を仰いで……………二二四
 イエスに對する本能……………二二四
 基督教の基調……………二三〇
 知遇の宗教……………二四二
 力の宗教……………二五一
 願くは敬虔の民たれ……………二五八
 人生の理想……………二八一
 人類共存の大義……………二九八
 聖書と人生……………二二七
 生活の進化……………二二六
 永遠の順禮者……………二四四
 人生の門出……………二五四

向上の歡喜と苦痛……………二六五
 人生の矛盾と調和……………二七一
 人生の刺……………二七七
 神の攝理と人類の試練……………二八三
 我らの擇ぶべき十字架……………二九三
 靈的飢餓……………三〇一
 心靈のあこがれ……………三一一
 事實の福音……………三二四
 兒童教養の秘義……………三三三
 陶人の手と改造……………三四三
 甦生の人……………三五三
 偉人の母を偲ぶ……………三六四

新らしき生命の歌び

四

秋興と宗教……………三七一

夕の歌……………三七九

祈禱の精神……………三八四

以上

此書を故江原素六先生に捧ぐ

春に酔ふも神を頌へ能はざるか

『視よ、冬すでにすぎ、雨もやみてはやすりぬ。もろくの花は地にあらはれ、鳥のさへづる時すでに至り
斑鳩の聲われらの地にきこゆ』——雅歌二の十一、十二——
『わが周囲の鳥はをどりぬ、遊びぬ。彼らの思念は知りたきも、彼らのなす微動すらも歡喜のゆらめきと
惟はる。芽さす小枝は手をひろげて、ものゝく微風を捕へんとす。
そこにも亦歡喜ありと我は感ぜざる能はず。斯かる信念の上より下るあらば、これ自然の氣だかき經緯なら
ば、人間社會の狀態をわれ悲みて可ならんや』 ——チャーズチーヌ——

四季の中、春は最も麗はしき時である。年々、歳々迎ふる春なれども未だ曾て春を
迎ふることに躊躇した者あるを聞かない。『古の人、春は曙といひけんも、宜なる哉。
日の光、藪しわかねば、數ならぬ垣根の内も冬にかはりてかゝやき出で、草木生ひて

春に酔ふも神を頌へ能はざるか

皆顔色を生じ、花待ちがほになごやかなるけはひも嬉し』と益軒が樂訓に載せてゐるやうに、洵に春は曙である。殊にバレステナに住んでゐた人々の春を待つ心は想像するに餘りあることである。即ち春の來れるは復活の比喩であると同時に、春は自然界にも、また人間界にも、等しく新らしき生命を齎らし、そして春の清氣に觸るゝときは人をして春の人たらしむるものがあり、又既往の歴史を追懷せしむるものがあり、更に回復力を確信せしめて 將來に慕進せしむるものがある。

曾てブラザー、ローレンスが、十八歳の頃雪に閉さるゝ森林の間を歩みつゝ、それ等の一樹、一木、將に春に逢ふて悉く緑の衣を被ふことの想像から、神の現前に關する新しき知見を開いたといふ物語は、決して不自然なものではなく、信仰の眼を具する者にはおのづから起る高い啓示であり、深い體驗である。余嘗て森林の豊富を以て名の知られてゐるオレゴン州を通過せる際、いかにも崇高な、森嚴な念が起り、宇宙實在者の大と力と美との並存することを深刻に印象されて今日に及んでゐる、由來自

然を歌ふ者、詩人、藝術家のみではない。否、眞の詩人、藝術家は宗教的直覺を有してゐる。かるが故に、詩人も、宗教家も宇宙の『リアリテイ』に觸るゝを要する。一旦之に面接するとき、物は心と變じ、形も亦靈と化し、自然は至高者の衣裳となり、地球は活ける至尊者の莊大なる住家となる。心の中に神なしとは愚かなる者の主觀的僻見にして萬有は神爰に在し給ふことを暗示し、神は萬有界に君臨し給ふことを實證する。コンコルドの哲人が、『自然界は報道せられんことを欲してゐる。宇宙間の一事一物は、悉くそが歴史を編むことに従事してゐる。惑星はその影に陪侍せられてすゝむ。輾轉する岩石は山上にその搔痕を留め、河は土壤にその水路を、動物は地層にその骨を、羊齒、木葉は石炭の中に、彼らが適當なる碑文を遺すものがある。滴り降つる一掬の雫は、砂中若くは岩上にその彫刻をなしてゐる。雪の中、一步も地の上に没却するところなく、多少永遠に亘る文字以てその進歩の地圖を印刷してゐる人間の各行爲は、友人の記憶の中にもしくは自己の行爲と顔との上に記載せられるものである。

る、而して空氣は音響に充ち、蒼空は表情物にみち土地は一切の備忘録と署名とにして萬有は悉く聰明者に對して告知する所の暗示を以て盈溢して居るのである。』(ゲーテ論の一節)

さいへるごとき。またブラウニングが『かくて神は萬有の中に内住し微小なる生命の發端より最後の人類に至るまで、創造の目的、生命の完成は實現せられたり。而して人類は造られたり。萬有悉く目的を具有す。しかし乍ら形成せられたる人間に於て、神に向つて歩をすゝむるの傾向は、更に新しく更められたり』

といへるごとき。此の邊の消息を道破するものありと謂ふべきであらう。

かくても心靈界に盲なる罪の子等は、何故に有神に疑義を懷き、春を歌ふも神を頌へ能はざるか。春に逢ふも、神に會ふ能はざるか。春色に憧がるゝも、神恩に感激する能はざるか。春光を浴びて歌ふも、靈泉を汲んで酔ふ能はざるか。曾てスピノザのごとく自然に酔ふものは、また須らく神にも酔ふものとならねばならぬではないか。

人生もし神なしとせば、吾人が恒に有する神に對する憧憬の心はない筈である。左り乍ら神を信する事は困難であるから信することが出來ないと云ふ場合には、宇宙は心の働であり、人生は靈の力に依憑してゐるてう我々の考察と體驗とを放棄せねばならぬ危機に遭ふのである。

神を信せざる際には、人間は宇宙に於て、より高き者に交渉することも、商量することも、冥合することも不可能の者となつて孤獨の状態に陥らねばならぬ次第となる。即ち獨り荒野に彷徨するジプシイのごとき者とすれば、吾人の人生は悲哀の極ではないか。もし、なしとせば、人生は一時の泡沫、無意義の破片たるに過ぎぬ。左れば吾人の思考力は燐火に似しく、我生涯は虛妄に類するのである。加之のみならず、此の世界は意義も、目的もないものとなり、所詮棲息し、享樂することの出來ない八幡不知の迷宮と變する次第となる。そして吾人の眼前に展望され、擴充されて居る所の秩序整然たる事物は、實際に於て何等の秩序なき、而も偶然の出來事、偽れる假裝

信據すべからざる幻影となり了るのである。吾人は果してかゝる世界に堪えられやうか。人生は果して件の高き心もなく深き眞理もなく、將た毫も秩序なき所謂單なる空間に成立せられやうか。此に於て、吾人は瞑想一番、以て此間の消息を尋ねばならぬ。活眼一轉、以て這般の奥義を悟らねばならぬと思惟せらるゝのである。

『視よ、冬すでにすぎ、雨もやみてはやさりぬ。もろくの花は地にあらはれ、鳥のさへする時すでに至り、班鳩の聲われらの地にきこゆ』

由來思想は思想家の産物であるごとく明々、白々たる意義以て表彰されてゐる宇宙及人生は所詮靈の事業である。乃ち天地は神の榮光に盈溢してゐることを看過してはならぬのである。

春は朗らかなる聲を以て神の『プレゼンス』を報ずるのみならず、また神の徳性を示すものありと謂ふべきであらう。即ち神が人類に對して顯はし給ふ親切は春の曙に於て著しく認めらるゝ、『エホバ其かうばしき香をかぎ玉ひて其意に謂玉ひけるは、我

再び人の故に因て地を詛ふことをせじ、そは人の心のはかる所其幼少時よりして惡かればなり』(創八の廿二) また曰く『なんぢ靈をいだし玉へば萬物みな造らる、なんぢ地の面を新にしたまふ』(詩百四篇の卅節) 如斯く神は常に親切なるのみならず、善にして且つ義しき方である。多くの爲政者や、外交家などが權謀術數をこれ事とするに反して、神は恒に約を守り年々、歳々春を與へ給ふ。

春は神の柔和を啓示する。秋は神の嚴肅稜威を語り、春は其柔和を語る。洵に風も雨も、宛も乳の流るゝが如く見ゆる。即ち秋は父の如く、春は母のごとくして秋は父の義を表はし、春は母の愛を表はす。かゝる天の父は人類の罪惡と過失とを恕しみ給ふて我々を幸福ならしむる。

春は神に依憑し、信賴する者に歡喜を告ぐる聲である。我々は罪深き社會に於て、自己のため、他人のために、善き事義しき事をなすことの頗る困難なるを覺え、時としてその努力の結果を疑ふこともある。しかし乍ら冬の後に春の來り、暗の後に明の

現はるゝごこく、困難の後に怡樂生る。神は決して人を苦しめ給はず、また忘れ給はぬ。『かゝる人はエホバの法をよろこびて日も 夜もこれをおもふ。かゝる人は水流のほとりにうるし樹の期にいたりて實をむすび、葉もまた凋まざるごとく』であるのである。

春は心靈上一陽來復の候を報する。神は自然を新にする如く、精神界をも新にする。今や高き山も、低き野も、漸く緑の牧場に化せんとする。即ち心靈界の春——永生の——は、人類の心、悉くその花を開きて香ばしき供物たることを想はしめらるゝ。春は人類の復活を報する時である。昨日まで一旦皆無に歸したごとく見えし自然も、今や春と共に風色を帯びて來る漸く將に滴らんとする草木は土中に深く根を置くが如く、人の子もまた世より隠れて朽つることあるも、『第宅多き』神の國にゆるがざる根柢を据ゆる。人は不滅不死の力を有す。死して葬らるゝは、宛も一粒の麥の地に落つるが如く、やがて良き果を結ぶ機會となる。

春の曉は永遠の曙を想はしむる。即ち地上に於ける吾人今日の生活は、やがて吾人が永遠の春を享樂する暗示ではないか。春の耕作は秋の收穫となり、此世の勞作は彼世への遺物となる即ち吾人は人生の春に於て大に耕し、大に草ぎり、大に蒔かねばならぬのである。洵に人の心はナイル河畔の沃野にひとしいのである。花は愛惜によりて落ち、草は忌嫌を逐ふて生ずる人生に於て、多く蒔き且多く收むる者とならねばならぬ。青年よ、老人よ、春の人となつて神を頌へよ。

神及び自然

先年内外讀書界の注意と興味とを惹き起せる英國のエチ・ジー・ウエルスの如きは其の著『見えざる王者たる神』に於て神に不可知的と可知的との二見解をたて、前者は覆はれたる存在者にして後者は有限神である。そして前者に對しては全く不可知論的な懷疑的な態度を表はし、後者は人生の闘に於て指導者として必要なることを高調してゐる邊などは大哲カントが純理と實際とを峻別せる點に比較すべきではないか、何となく其表白の形式に於て似通ふ所がないでもない。

ウエルス曰く『すべて智識さるゝ事物の背後には測知しがたき幕が懸つてゐる。存在の終局は覆はれたる存在者にして、其が本體は生か、死か、善か、悪か知ることは出來ないやうに見える。又其存在者が單純なるや、複雑なるや、將た神聖なるやは吾人の關知する所でない。智識に制限されてゐる吾人に取りては是れ以上知ることは出來

ない。かゝる問題は實際限りのない錯綜したるして不可能なものであらう』と。

又曰く『神は人格であることは近代宗教の尤も強く主張する所である。彼等の宗教の中心は此の點に存する神は自分が友を理解するやうに理解されらる所の人格であり、奉仕され易く又奉仕を受くる人格であり、吾人の共鳴者同情者であらねばならぬ。又其の神は吾人の王者にして吾人の服従すべきものであらねばならぬ。彼は吾人の大將であつて彼を理解することは吾人の生活の方針となる。彼は吾人に同情し、又理解する。彼は吾人に援助せられ、又歡ばるゝ。彼は希望を有し又企圖を有するのである。即ち神は抽象的理想でもなく、言語上の瞞着手段でもなく、更に又無限な者でもない、實に神は劍を抜いて奮闘する勇者たるのである』と。

斯くの如き實在的な、奮闘的な有限な神を著者が新宗教の中心となすに至つた次第は、『プラグマテズム』の思潮に負ふところ多きによること且つ今次の大動亂に際し、嘗て自から白、佛、伊地方の慘憺たる戦線を視察して大に精神的變化を來したることによ

るこいはれて居る。

そして此書が不信、懷疑の徒に向つては多少の故障とならんも、吾人に取りては依然として所謂『覆はれたる存在者』は所詮『天の父』であり、そして『有限の神は』結局『キリスト・イエス』であらねばならぬと理解せられ、又論結せらるゝに至るのである。實用主義者の陥り易い弊害は、こゝに端しなく曝露されてゐて坐ろに其矛盾を感せしめる。

由來ギリシャ人の神の觀方は信仰的でなく、學究的な趣がある。即ち彼等は神を以て宇宙萬有を統一し、調和する所の偉大な思想家の如く思惟し、そして其神に接觸するには理智の活動を敏捷ならしむべきをいひ、人の思想のすゝみ行くに従つてますます神の姿に肖るものと見たのである。次にヘブライ人の神觀はいかんといふに、ギリシャ人の神を思想と觀たのに反して意志と認めたのである。即ち神は完全な意志である。此に於て惡意志を更めて善意志に移り、罪惡を去りて正義に就くことが神に近

づきうる手段で、そして彼等の理想であつたのである。

次に東洋人の神觀はいかんといふに、神なる言葉よりも上帝、造物主、天なる言葉が、より多く使用されてゐた。さて其『天』は自然若くは運命と同一視されて居たから天道是か非かの浩歎を發してやまなかつたのである。孔子が『罪を天に獲れば祈る所なし』といひ、陶淵明が『かの天命を樂んでまた何を疑はん』といつて自覺に基ける表白の如く見ゆるも固より天其物は不明瞭、不可解に屬し、そして信仰を以て天を仰がざりし彼等の態度には酷だ懷疑の調を帯びてゐる。又精神の修養に餘程心を注げる我邦の益軒すら『天の命を降すや、其の偶然の中亦二あり。有生の前にうる者あり有生の後にうる者あり。有生の前にうる者は前定の命、自ら厚薄あり。有生の後にうる者は歎然として而して之に遇ふものなり。天の禍福を降すや、偶然の中自ら此の二者の異なるあるのみ……噫、天の人に賦する、其厚薄の分同じからず……是を以て天命は偶然の二字に歸す。惟人のうくる所幸あり、不幸あり、これ天を怨み、人を

尤むるもの、當に省悟すべき所、而して君子の其命分に安んずる所以也』と述べて認め主義、泣き寝入り主義を主張し、『噫』の一字は何となく天に對する怨恨、人に對する嫉妬、世に對する不満を表はし、其處に或者の不明、不可解より起り來る言ひ知れぬ寂寞と悲哀と煩悶とが暴露されて居るのである。會て明治の青年學徒にして出藍の譽のあつた樗牛が盛んに『日本主義』を鼓吹して大氣焰をあげ、時に『基督教徒の逢迎主義』を論じて吾人の反省を促がせる點などは彼の得意想ふべきであつたが、もしそれ彼が『人生終に奈何』の一篇に至りては吾人をしてその失望の甚だしきに驚かしめる。彼れ結論して曰く『縦ひ身を觀じて岸頭籬根の草とし、命を論じて江邊不繫の船となすも、期する所は一の墓門にあらずや。生前の事業、夢中の觀の如く、死後の名聞、艸露の如くんば、茫然たる吾が生、それ何くにか寄せん。大哀と謂はざるべけんや。嗚呼人生終に奈何、予往を顧み來を慮り、半夜惘然として吾れ我れを喪ふ』と。何たる感傷的な告白であらう！。畢竟神なき、希望なき人生は夢中の遊戯となり了

し、かくて不信となり、不信はやがて不安となり、不安はやがて大哀となり、大哀は終に喪身失命の窮境に陥らしむるに至るのである。

然らばイエスの神觀はといふに、智性を過重して行詰れるギリシヤ人のそれと善意志に達する能はずして頑固に陥れるヘブライ人のそれと、そして或物の不明なる所より宿命觀に囚はれてゐた東洋人のそれ等とは全く趣を異にして、智よりも、意志よりも、天命よりも、神の人格と其の情性を高調し、無限の愛に盈ち給ふ人格神こそ人類の切なる要求に應驗する所以を啓示し以て眞個に温かな愛の神を説いたのである。そして吾人に私心私慾なき玲瓏たる愛の實行を促して居る。

抑も從來東洋に於て唱へた『天』なる物の本質は聲もなく、香もなき物に非ずして一の大なる存在者を意義してゐて即ち一大人格を暗示するではなからうか。そして宇宙と人生との間に『一大人格』の活動を鮮かに認識したのはイエスである。かくて之を發見せるイエスは『我父は今に至るまで働き玉ふ。我も亦働くなり』と宣うて樂天

的、活動的、奮闘的な世界観及び人生観を樹立した。かゝる宇宙に存在する人類は天父の愛の中に生き、そして其の旨を實現すべき使命を帯びてゐる。世に悩みあり、矛盾あり、衝突あり、試練あり、艱難あるも、此等は吾人を教育する要素であつて、パウロの『凡の事は神の旨によりて招かれたる神を愛するものゝ爲に悉く働きて益をなすを我儕は知れり』となり、かくて人を活す力は與へられ、そして之が吾人の永遠の生命となり、萬事に耐ゆる源となるのである。

吾人は更に進んで十八世紀に於ける英國の宗教界を聯想し、回顧せずには居られないのである。即ち當時の信仰はいかんと云ふに、神の活動を愛や、智慧や、生命などの意義として観るよりも、寧ろ冷淡な法律や嚴酷な權力の意味をもて解釋せられた観があつたのである。かるが故に自然に起り來る反動として超絶神觀を有するに至り、神は高く遙かに隠れて居給うて、そして宇宙萬有は自働的に存在し、運動する物てふ弊竇に陥りて、遂に神と自然と人間との個々分離を見るに至つたのである。於此乎

一方には人類を孤立せる物として取扱ひ、乃ち人類相互の間を一貫し、統一し、融合して内住せる神を忘却し、他方に於て人類を神より分離して彼等の關係を只だ單に外形的のものたらしむるに及んだのである。かくて人間は盲目的な運命に囚はれ、自然は一種の器械となり殊に人間は人格として本來固有の威嚴を失ない、人間の共通せる同情や向上心や、嘆美の念などは漸く其關係と趣味とを沒了するに至つた。即ち神の活動なき宇宙及び自然は毫も人間の心靈を惹くものなく、又人間と自然との交渉の存する理由はなくなる。そして自然は人間の心情を鼓吹し、激勵し、慰藉するの神秘なく乃ち明媚なる山紫水明郷も亦吾人の錦心繡腸を涵養する魅力を有せざるに臻るのである。恚した場合に於て宇宙は實に冷却せる屍であつて、自然は眞個に枯木死灰のみと觀らるゝのである。

かゝる危機に際して世に現はれ、自然に對する精神的、道德的解釋と闡明とを與へて當時の自然觀及び人生觀に新たな光明を投じた者は即ち我がウヲーヅヲス其人であ

つた。彼は當時の人々の閑却し、逸失して居た自然界に伏在せる真理と愛とに充てる者の發見者であつた。曾て李白が『雲想衣裳花想容』と歌つた様に、自然は彼に對して神の活ける衣服であり、また見えざる者の顯現せる姿であつた。恰もダンテの神曲は彼の深甚な信仰を表彰し、ミカエル・アンゼロの彫刻はその雄大な理想を發揮するやうに、大山、小川、一朵の雲、一滴の水も、悉く崇高森嚴にして同時に優美な宇宙の大精神を語りつゝある。所謂『語らず云はずその聲聴えざるに、その響は全地に普くそのことばは地の端にまでおよぶ』ものである。彼に取りては自然界も、人間界も常に思想の發表のみならずまた麗はしき感情の流露である。そして此の思想や、感情などは見ゆる世界よりも更に見えざる實在界から來る所の思想と感情とである。何故となれば大なる實在者は現象界の創造者にして又生命の本源であるからである。そして無限は有限によりて解釋せらるゝ、何となれば萬有は悉く尊き或者が我ら人類に自己の存在を暗示する方法なのであるからであるといふ。

かくて此の物質界を解釋するに當りて、宇宙的同情と道德的解釋とを用ひた彼れ詩人の功や大なりと謂はねばならぬのである。即ち詩人に取りて、自然界は神の智慧や、愛や、力など、つきざる永えの流れにして、同時に人間の教育者、保護者、又聖き友であつたのである。詩人に取りて此の物質界は即ち精神界にして、可見の顯象は即ち不可見の實在には非ずやと思惟さるゝほど深甚な意義を含蓄してゐた。かるが故に此の『パラボックス』の世界に於て、外見錯綜して入り込み難く視ゆるも、而も根柢に於て統一のある整然たる萬有の面帕の下に我を魅し、勵まし、慰むる崇高な或者の儼在を認めたのである。吾人左に引用する所のものは自然詩人がチンタンアベエの數哩上にて再遊の際、歌へるものにして傑作中の傑作である。自然詩人の眼前に變貌せる自然の美はしき容と彼の心裡に投影せる萬有の妙しき姿が、いかに詩人をして恍惚たらしめ、また愉悅せしめたるかを偲ばしめると共に彼の本領は爰に遺憾なく發揮せらるゝ。

新らしき生命の歎び

我が高く擧げられたる想は
よるこびに充ちて

己を魅するところの

或者の儼存を感じぬ。

そが或者は崇高なる靈にして

一切の間を深甚に縦横し

西山の夕照、端しなき海洋

生ける空氣、蒼き天及び

人間の心裡を住家となす。

すべての思慮者

また思想の目的物を推しやり

萬有を一串して輾轉活躍する

或動力と精神を感知したりき。

されば我は依然として

牧場、森林、山嶽

而して緑の野より

打眺むる所の萬物を愛し

目に映じ、耳に響き來る

此の宏大なる世界の戀人なれ

耳と目が半ばは創る物をも

又之より流れ込む物をも。

我が尤も純潔なる思想の錨

我が哀情の保姆、指導者、守護者

及び我が總ての道德状態の

安定所をば自然界も

感覺界の言語の中に

我は満足して認めうるなり。

彼れ詩人は固より神學的暗示や、また哲學的辨證などを試みた次第ではないと思はるゝが、しかもかゝる大思想は信仰界に向つての顯著な貢献であつた。有神を立證する點に於て種々な方法あるも、審美的直覺はたしかに有力なその一手段たるべきを信

する。自然詩人に亞で自然の冥想と凝視とに於て凡ならざる感興を有せるはコンコルドの哲人にして、彼も亦能く這邊の消息を理解し、そして眞理を道破して遺憾なしと謂ふべきであらう。

吾人は常に審美的直覺や、道德的直覺などに依りて以て自然界に於ける尊き或者を認識するのみならず、近代の學術によりて益々吾人の信念を強うするものがある。進化の理は事物の一致と聯續とを告げ、かつ萬有界は唯一の法則下に立ち吾人に對して暗示する所のもの多きを語る。即ち從來吾人の解し難き點までも、むしろ通曉せしむるのである。確に進化の理は神の善なることを立證する。進化の經綸は理想發展のそれにして萬有の統一を目指して居る。そして吾人の生命も良心も、道德も、理性も、審美性も悉く一切の創造者にして又その本源なる或者に肖似し、彷彿し、同化せんとして上へ上へと進んで行く。よしやそが上進發展の程度が緩慢であり又その方法が迂回曲折して居るにもせよ、一進一歩向上しつゝあることは疑ふの餘地がない。

我が國民性の嘆美者たる芳賀氏は之を論ずる中、その一特質として草木を愛し自然をよろこぶ點を擧げ

『四圍の風光客觀的に我等の前に横はるのは、すべて笑つてゐる中に、住民が獨り笑はずには居られぬ。……現世を愛し、人生生活をたのしむ國民が天地山川を愛しあこがれるのも當然である』

といつて居る様に秀麗な、優美な自然の中に生れ、育くまれ、圍繞されて居る我民族は自づから自然にあこがれ、自然に親しみ、之と融和してゆく傾向を有してゐる。かゝる自然を友とする所に日本人の慰安即宗教が存する。實に自然は日本人に取りて幸福の策源地であり、避難所である。かるが故に彼等は邸宅にせよ、隱宅にせよ、之を構ふに當りて先づ清楚な小池を環らし、其邊に種々な花卉を列ね、多くの盆栽に培ひ、以て幽趣を湛へ、歌や、俳句を口吟み、謠曲を友として以て清懷を攄べ、そして又活花や、骨董や、圍碁や、抹茶などに對して無量の興味を汲んで居る。しかし乍ら日本人の短所、缺陷も此に潜んでゐる。兎角日本人が深甚な、沈痛な、雄大な思想や

生活に乏しいのは、かゝる外界よりうくる感化と謂はざるを得ないのであらう。

從來日本人が淺薄な樂天主義を把つてゐるのも、さうかと思ふと一種の宿命説に囚はれて不自由な生活を送つてゐるのも、また神をも怖れぬきて不虔な態度をむしろ得意がつてゐるのも、只だ自然の皮相表面のみを見て、其眞實體を看破し洞察する所なき罪に坐すると想はるゝ。即ち多くの日本人は崇高森嚴な自然によりて、『一大人格』を認むる靈犀な信眼なく、徒らに之に馴れ、之に戯れ、之に淫し、そして之を玩弄物の如く輕視し去るに過ぎぬ次第なのである。此に於て我が秀麗な山川は吾人の心靈的宗教的向上に關して幸と云ふべきか、將た不幸と云ふべきか、我れ甚だ之に惑ふ。

余曾て米國マウント・タマルバイの麓に巨樹から造られた古き水車を以て名あるミル・ヴァレーに遊んだことがあつた。それは桑港灣一帶に於ける米人メソヂスト教役者會が同地の婦人會の招きをうけて催うされた機會であつた。講演がすみ、小中食がすむと、周圍十數呎もある數本の巨樹の生茂れる谷間を尋ねいかにもその雄大な光景

に打れた、此の刹那日頃表情の訓練に富んで居る數十人の紳士等は、誰が指導者ともなく、一齊に聲を發し、神の永久性と其妙へなる生命と勢力とを讚美して、光榮を神に歸したことを想起するが、こゝに米人の宗教的情操が表はるゝと同時に彼等の自然に對する敬虔な態度が認めらるゝ。

自然より偉大な感化をうけつゝある我民族は一種藝術的な、美的な、享樂的な人生觀や、また自然觀を有してゐる。故に吾人の傳ふる倫理的宗教は彼等に向つては餘りに窮屈な窄き門となりて之に入り來るものゝ意外に遅々として進まざるの憾がある。しかし乍ら我民族は何時迄も自然の中に立籠りて放肆な、淫逸な生活を送つてはならぬ。我民族は眠より醒めて其の根本に歸趣せねばならぬ。單に自然に醉ふが如きは弊害の甚だしきものである。道德拔きの所謂耽美者、享樂者の社會に及ばず茶毒はいふに忍びないではないか。『默示なければ民は放肆にす』とは智者の叫びであるが、默示なく信仰なき國民は所詮偉大を成し遂ぐることは出來ない。

遮莫、今や實に三伏盛夏の際、清き心と敬虔な態度とをもて自然に對する愉悅こそ、銷夏の最良法と信ずる。かるが故に『われヨルダンの地よりヘルモンよりミザルの山より汝を思ひいづ』と歌へる古イスラエルの聖者と共に、吾人も亦雪を戴く不二の山巔に、月を宿す琵琶の湖心に、涼味漾ふ木曾路の里に、小波打寄す須磨の磯に、到處に於て無限の愛を以て天地を覆ひ、人生を裹める神をおもひ出したいのである。

神の聖姿

古來何の民族間にも順禮者は存在してゐて、その目的すところに向つて發程する。即ち或者はエルサレムに、或者はローマに或者はメツカに、或者はアシシにと進んで往く。そうして我國の順禮者中『父子の邂逅』を望んで其途に着く者もあつた。願れば吾人も亦一個の順禮者である。吾人は永遠の故郷に其父を尋ねて止まぬ心靈的順禮者である。即ち吾人は現實の生活に全く安住することを欲せず、又物質世界にも満足することを望まぬものにして、此地上にありながら永遠の都市、不朽の或物を探つて居る。即ち永遠に在りて存在する聖き姿を尋ねてやまぬものである。ピリポが主に向つて『主よ我儕に父を示し給へ然ば足れり』と言へるいのりは實に人類全體の祈を代表したものである。

由來吾人は信仰の對照者を要して居る。そして其の對照者たるべき神は、神は上也

と言へる神に非ず、所謂る神人同格の神に非ずして、靈なる眞なる神である。即ち吾人の造主、其守護者、其攝理者、其父なる神は吾人の尋ねてやまぬところである。されば吾人はそが神の聖姿を何處に、又いかにして尋ねべきや。果してそが永遠者の實體に接觸し得べきや。吾人は先づ歩を進めて自然界と人類の歴史とに之を要むるの順序なることを覺ふ。

今爰に或る大藝術家あり、春を描けば眞に春の光景を映し、秋を寫せば更にその真相を傳へ、又悲哀の調を帯び、悅樂の境を表はし來りて、宛も沙翁が人生の眞相實體を語るが如く巧妙なるものありとせよ、そが作品に作者の面影を偲ばしめる。即ちミカエル、アンゼローの如き大藝術家の作品には、自ら其が技量の上に彼の投影を認むるのである。嘗に美術品のみならず、音樂に於てもさうである、ベートーベンや、ハンデルや、ワグネルやの曲調には、其背後に彼等の人格が活躍して居る。そして美術は無聲の詩で、音樂は有聲の詩なりと言ふことを得べくんば共に兩者の背後に潜在して

居る詩人の姿を想はしむる。即ち詩は思であり、志であるからには之を表彰する人格の姿を想像せずには居られないのである。故に美術にせよ、音樂にせよ、そが作品にその作者の人物、趣味、氣分傾向が漲つて居る。藝術品は畢竟するに人格の投影に外ならぬと思ふ。

然らば則ちこの自然界を無限の藝術品と假定して、此にそが作者なる永遠者の姿を見ることは出来まいか。『太初に道あり、萬物之に由て造らる』曾て大哲が宇宙の二大双美と呼んだ、所謂る天に輝ける星辰の姿と、内に閃ける心靈の姿とは永遠者の二大傑作ではあるまいか。吾人は永遠に閉されたる神秘の幕を啓きてこゝに永遠者の聖姿を凝視することは出来まいか。詩人が『もろくの天は神の榮光を表はし、穹蒼はその手の所作を示す』と道破せる詞藻の中に萬斛の眞理を湛えて居ることを思惟すると同時に、イエスが『ソロモンの榮華の極の時だにも其装この花の一に及ざりき』と歌へる大直覺にも千古の奧義を啓示してゐることを學ばねばならぬのである。所謂る宇

宙感情もこゝに其秘義を要めて居る。深き森や、優しい花を賞しつゝ、神秘的瞑想に耽けるのも、崇高なる山岳に面し、茫漠たる海洋に臨んで驚嘆の念を發するの、春の暖い日光を浴びつゝ、花咲き、鳥歌ふ野邊に逍遙するの、秋の靜かなる夕、銀のやうな月光に照されつゝ、仰ひて以て輝ける天を拜むのも、即ち永遠者、無限者に對する人性自然の憧憬であつて、我が心靈の順禮者が永遠者に歸依せんとする宗教三昧の法悦妙境なのである。此に於て吾人は自然萬有に對するとき、其が間に漲り居る力と美と大とを直覺せずには居られないのである。ウォーヅウォースが悅樂の涙を濺いで自然に對したのも、エマソンの自然に親んだのも、是からである。

斯くて永遠者の記録として吾人の眼前に開展さるゝ宇宙は力と美と大に充ちて居る。そして之を創造しかつ今に至る迄働き居る神は吾人を守護し、抱擁し給ふ。吾人は所謂る宇宙感情に由て其の姿を認め、其が本體に信賴し、歸依し、一任するところに宗教の生命が活くるのである。

更に靈眼を轉じて人類の歴史を派察せんか。即ち歴史てう神の大藝術品を觀照せんか、神の姿は力と美と大とを以て被まるゝのみならず、此には又聖と善と義との姿にて表現し給ふことを認めずには居られないのである。しかし乍ら人類の有史以來既に數千年、イエス世に出て『我誠に實に汝等に告げん』と宣て以來業に二千歳、此の間に人文開展醇化の遅々たるかを思はしむる。或時代には著しく神の姿の示現されたることもあり、或時代には無下にその姿消え失せて跡なきやう見えたこともあつた。即ち聖と善と義とより成立せる神の意志が實現されたる時代もあり、又其意志の阻害され、傷害されたる時代もあつたのである。吾人は時として宇宙に神ありや、人類を指導する見えざる手なきか、我々を攝理し、保護するものなきかを疑惑せしむることなきに非ずと雖も、而も大傑作が多くの歲月を要する如く、人類の完成を期し給ふ永遠者の精緻巧妙なる工夫にも亦た大なる時日を要し給ふことに想到せねばならぬ。一個の少年を教養するにもせよ十數年間を要す、況して人類の完全に於てをやで

ある。而も歴史の歸着するところは神である、歴史は神の姿を鮮かに描かんことに努力して居る。そして吾人は二千歳以前の聖者の靈と今日我々の靈とに脈絡を存して居ることを知る、即ち昔日の聖者の姿は今日の我々の姿と類似して居ることに氣づかれる。是れ正に歴史を貫通せる大意志の存することを暗示するのではないか。

古來人類の歴史に於て、眞の敬仰、讚美の情より花環を捧げられたる人格は、いかなる人々なりしや、否永遠に亘つて人類より讚美さるゝ人物はいかなる種類なりしや。固より單に劔の人に非ず、單に力の人に非ず、單に學問、智慧の人にも非ず、實に人格の人であつた。即ち聖と善と義とを實現せる人格者こそ其人にして、人類より讚美されつゝ花環を捧げられて居るではないか。今日吾人が眞に花環を捧げんとする人も此の人格者に外ならぬのである。莫遮れ、人類の歴史はこの人格者の勝利である。カライルは世界の歴史は英雄の歴史と言ふて居るが、吾人は人類の歴史、眞に人文開展の歴史は聖と善と義との權化たる聖者の歴史と仰がねばならぬ。然り、そして此の聖

者によりて、此の善者によりて、此の義者によりて、即ち永遠者の意志を最も能く實現せるもの、所謂『道肉體となりて我儕の間に寄れり』と言はれて居る道の實現し、理想の權化したるイエスに於て人類は最も能く永遠者の姿を認め得べしとする『我を見し者は父を見しなり、何ぞ我に父を示せと云ふや』。されば最もよく其姿を示現せるイエスの姿はいかなる姿を取りしや、威勢よき姿なりしか、將た謙れる者の姿なりしか。

神の姿はイエスに由て痛ましい姿となつて顯現はれた、即ち愛の姿であつたのである。蓋し愛の中には痛ましい、寂しい、悲しい、而も森嚴な、崇高な、壯烈なものが含まれて居るからである。從來の宗教は只だ嚴しい、輝ける、強き姿のみを拜まんとして居た。即ち言はゞアルプスの崇大なるが如き、ロツキーの英姿なるが如き神々のみを拜んで居たのである。しかし乍ら吾人の神は此の痛ましい姿の神である。イザヤ曰く『われらが見るべきうるはしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたふべ

き艶色なし、かれは侮られて人にすてられ悲哀の人にして病患をしれり……彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、自ら懲罰をうけてわれらに平安をあたふ、そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり』と。實に此の痛ましい姿の神がなかつたならば、我々の宗教は其の功果の半ばを減ずるであらうと思はれる。イエスの姿は實に此の痛ましいものであつて、謙遜と忍耐と犠牲とに富める姿であつた。イエスに此の姿があつたから、人類は救はれるのである。我々のやうな、我儘もの、だつ子、やんちゃもの、すねもの、粘土細工に比しきものも、イエスは捨て給はぬ。己を賣りて敵に渡さんがために來れるユダにも『友』よとて過去の友情を追懷せしめ己を十字架につけし輩儕にも『父よ、彼等を赦し給へ、其爲す所を知らざるが故なり』とて天父に赦罪の祈りをなし給ひたるイエスは、實に愛の權化にしてこゝに坐るに痛ましい神の姿を映し出して居る。イエスの如き、謙りて人の貌を取れる姿に由て其が作者なる永遠者の本質を認めうべしとなすのである。『未だ我をしらざ

るか、我を見し者は父を見しなり何ぞ父を我儕に示せと言や』とは永遠者を代表せる者にして始めて斷言し得る金玉の聲である。

斯の如く吾人は神の大藝術品たる自然界と人類の歴史とイエスの人格とに於てそが創作者を惟ふとき、自から創作者のいかなる者なるか、想像せらるゝ。即ち作品即作家の人格であり、宇宙即永遠者の姿でありイエス即天父の姿である。青年時代に於てバイロンや、ハイネやの詩、ツルゲニエフの小説などに心醉せる詩人にして今やデンマークの一市外に於て聖者フランシスの跡を辿りつゝ、貧者と労働者との友となり居るヨハネス、ヨルゲンセン、曾て順禮者となりてフランシスの故郷なるアシ、の古城に往き、アシ、の夕に對して『此處は實に天國に到るの道也』と絶叫したと言ふことなるが、實にイエスに依らざれば、父の所に住くこと能はざるのみならず、イエスのライフを離れて永遠者のそれを覺ること難くイエスの働を外にして永遠者の活動を認むること難く、更に又イエスの謙遜と忍耐と柔和とに充てる姿を閑却するなら神の聖

姿を見失なふであらう。しかし乍ら靈の人の偉大は、肉の人には小なるべく、神の人の盛観は、世の人には微なるべしと思はるゝ。而も神秘を解することを得る心の目には誰か此の如き偉大を極めたるものがあらうか。靈界の消息に通ずることを得る底の人には誰か此の如く不朽の光榮を齎したる者があらうか。實にイエスは神の永遠に無限なる愛の姿を表象するところがあるのである。

天地無限の神愛を悟れ

『元始に神天地を創造たまへり』(創一ノ二)といへる一言に據りてもユダヤから起つた宗教の神は全く被造物と區別された天地の主宰者であつて所謂神人の懸隔が示されてゐる。そして是れまで我國に存在した多くの神々は、所謂神人同格であつて、國民が偉人や忠君愛國者を崇敬して祭り上げた者に過ぎない。新井白石のごとき『日本の神は人にして神にあらず』とまで喝破してゐる。そこで我國の當局者は『神社神道』と『宗教神道』との二門に分ち、前者は單に古英雄の靈を崇る神社となし——例せば湊川神社、名和神社、東照大権現、乃木神社の如き——後者は不純な迷信や非理性な信條を含むといへ、天理教、扶桑教、御嶽教、黒住教のごときを含んでゐるのである。しかし乍ら當局者のかゝる區別も實際に於ては混同を來し、平將門を祭る神田明神も宗教神道と同一視されてゐる。かるが故に我國民の間には、未だ此の區別がハツ

キリして居らぬやうである。

サレバ我國に於て從來神人懸隔の教がなかつたか。我儕の祖先は全く無名のエホバを信じて居らなかつたか。パウロの所謂『知らざる神』を拜して居らなかつたかと云ふに、實際は天地の主なる神を尋ね、探つて居たのである。我國民の間に最も親炙されて居る明治天皇の御製にかゝる。

『目に見えぬ神の心に通ふこそ、

人の心の誠なりけれ』

『我心及ばぬ國の端までも、

夜晝神は守りますらん』

『人しれず思ふ心のよしあしを

照しわくらん天地の神』

とある此の神をいかに解すべきかに就て二種の見解があるやうである。即ち之を倫理

的に見て其立場から、單に神は人なりとすれば、神とは上在者、即ち神とは上、優れる意となる。更にすゝんで之を宗教的に思考せんか、深き意義を含蓄するに臻るのである。所謂その日を惡しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ雨を正しき者にも、正しからぬ者にも降らせ給ふ神となり、拜する者に靈と眞をもて拜することを要め給ふ神となるのである。單に倫理的立場から之を用ひ給ふたと見るなら、先帝の信仰を餘りに淺薄に解したるの毀を免れない、目に見えぬ神の心に通じ給ふた先帝には、靈にして眞なる、善なる、美なる愛なる天地の主宰者を敬仰し、崇敬し給ふたと解したしかに之を宗教的に認め給ふたと拜察してこそ、先帝の面目が活躍する。尤も正しい、尤も貴い人は、最も高い、最も聖い神に肖ることが眞理とすれば、先帝は此間の消息を暗示する理想的象徴と思惟せらるゝ。吾人はダビデ王の偉大を政治的才能や、軍略的畫策などに發見せずして彼の宗教的情操に於て、熱誠なる天父の憧憬に於て之を認むるごとく、先帝の偉大を物質的、政治的文明の建設に發見せずして其が精神的、

内面的王國の王座を占め給ふた所に之を仰がんと欲するのである、刻下明治神宮は國民崇拜の的となつてゐる。先帝に額づくに當り、斯心を以て拜するに非ずば、何等交渉する所はあるまい。徒らに御利益を願ふが如きは先帝の靈を煩はすに過ぎない。

由來史上、神についての二大傾向が存する。即ち超絶神と觀るのと汎神と觀るのことは是れである。高く遙に在し給ふ所謂超絶せる神と觀るとき、宇宙人生は孤立せる一種の器械のごとく見らるゝに墜りて必然運命や、宿命説などに囚はるゝに及ぶのである。頑として我々の祈に耳を傾けざる神を信ずる場合にはおのづから運命説に陥らざるを得ないのである。我邦の貝原益軒は樂天的、理想的儒者と仰がるゝ一人なるが、而も彼は『天命は偶然の二字に歸す。惟人のうくる所、幸あり不幸あるのみ。是天を怨み、人を尤むる者の當に省悟すべき所、而して君子の其の命分に安んずる所以なり。』また『人の命を天に稟くるや。その資各々厚薄崇卑あり。故に富貴、貧賤、吉凶、禍福、皆天に繋れり。その稟受することや定分あり、遷移すべからず。唯須らく法を

行ひ、安靜にして天命を俟つべきのみ』といひて、何となく天道是か、非かの疑惑的態度を曝露し。此處に諦め主義泣き寝入り主義の容易に諦めがたき悲哀を表はし、端しなく『人格神』の明かならざる、知られざる處に、言ひ知れぬ暗黒と疑惑と寂寞と悲哀の存することを暗示するものがある。如是きは運命説の悲劇である。

次に萬物悉く神の顯現なりと見る所謂汎神教にも創造者と被造者との區域なく、即ち神、人間、自然の別がない。かるが故に上に權威がなく、下に責任がない。加之のみならず、道義の本源を滅却するにいたるのである。その結果は物質論者と運命を共にして拜すべき神を有たないのである。拜すべき神なき人生は所謂無神無靈魂の人生となり了する。かゝる生活は斷念主義・絶望主義に陥らしむるもので、世に是ほど恐ろしいものはない。即ち宇宙及び人生を無人格的に觀る不信はご人類の運命を小ならしむるものはないのである。

かくて宿命觀と汎神説とは人類の二大鳩毒にして人類の生命を萎縮せしめ、微弱な

らしめ、死灰たらしむるに反してイエスの神についての信仰は人格的で、道徳的で、活動的で、奮闘的で、そして樂天的である。艱難の多かつたイエスの生涯に於て、其神觀の理想は遺憾なく發揮されてゐる。『されど我ひとり居るにあらず、父われと偕に在すなり』といひまた『なんぢら世にありては患難あり、されど雄々しかれ。我すでに世に勝てり』と宣ふたイエスの生涯は、實によく信仰の徹底を實現する。パウロは『凡のことは神の旨に依りて召されたる神を愛する者のために悉く働きて益をなすを我儕は知れり』と叫んでゐる。吾人はこゝにイエスの教と生命と力とを發見する。我は此の世界——天父の世界、我らの世界——に存在することを意識し、確信する。而も天父無限の愛の御手に導かれて生きて歩みつゝある。そして永遠に亘りて宇宙及人生を攝理し、經綸し給ふ深き意志を實現すべき特權を有する其一人である。其意志を奉體して世に立つに當り矢面に艱難がふりかゝつて來る。しかも其惱みは我らの靈を激勵し、鼓吹する方法のみ、矛盾と衝突の多き人生に於て我を活す力はイエスの神で

ある。天の父は我を活かして働かしむる力となる。天の父は我が奮闘の泉となり、また勝利の秘訣となる。即ちイエスの神觀に據れば神御自身が人類の切なる要求に應じて或は恵を與え助を與え、力を與え、そして更に我を鞭ち、我を勵し、我を慰め、我を育み、我を引上げ給ふと信じて進むことが出来るのである。そして一方人類は天父に對して敬虔、信賴、從順の態度をもて自己を捧ぐるのである。即ち一方自己の力と徳と愛と心とを注ぎ入れ給ふ神に對して人類は聖き活ける祭物として自己を神に捧ぐる。こゝに深甚な宗教的經驗と價値とを藏することを認むるのである。

吾人は本文の初に於てユダヤの神觀は神人懸隔なることを擧げて置いた。即ち人類は被造物であつて汎神論者の唱ふるごとく我々は神ではない、愛に依りて創られ、そして神によりて生き、動き、又存在してゐる。だが我らの信ずる神は法庭に於ける裁判官のごとく法律的、命令的、壓制的ではない。之に反して神と我との關係は友情的、父子的である。親が子を取扱ふがごとく、友が友に接するごとく親密である。天の父

は不斷の忍耐と熱情と至愛を以て我らを育み給ふのである。即ち人生は神愛に裏まれてゐる。言ひ換ふれば神の無限愛は人生を裏んでゐる。『神の靈水の面を覆たりき』(創一〇二)常に宇宙人生を裏んでゐる。そして『善し』と觀たまふた世界は、永遠に亘りて善の世界、眞實の世界、愛の世界である。英語を日用語としてゐる者は雨が降つても、雪が降つても、風が吹ても曇つても“Good morning”“Good night”“Good by”で生活し、往來してゐる。吾人はこゝに神が善しと觀た世界に住む者の特權と意義とを發見する。神なき世界及人生に何の善き事があらうぞ。何の生き甲斐があらうぞ。何の期待希望があらうぞ。神常住すればこそ、人生の意義が分り、恰も雨後一層の快晴を得るごとく惱みの中に、惱みの後に、惠の彌や増すことを覺ゆる。日本人が雨につけ、風につけ、嵐につけ、悉く不安と不平の色を現はし、聲を發するのは根本的に善の神を信じ、愛の神を信する點に於て缺くる所から來る短所ではあるまいか。たしかに信仰は生活を創り、理想は事實を生むものである。善き神を認めざる者は善き世

界を創り得ない。愛の神を信せざる者は愛の世界を造り得ないのである。人生に尤も必要なるものは善の神、愛の神を確信して進むことである。

かくて善意志の神を信じ、無限の愛を傾て天地人生を育み給ふ神を信する場合に、天地、山川、草木、悉く我師となり、我友となり、我慰藉となる。我ら朗かなる天上の月に對せんか、宛がら月自ら語るがごとく、麗はしき地上の花に向はんか、宛がら花自ら交はらんと欲するもののごとく感ぜらる。

此の天地は人格なき虚空と見る上に安心ありや。或は人格者の靈臺と見る上に希望ありや。人生時として神なきが如く感ぜられ、また時として其姿を見失ふ危機なきにあらず。しかも微弱乍ら信仰を有するとき、全然不信の淵に陥る者に勝れることは吾人の經驗ではないか。實に我々は人格的世界に處して天父無限の愛と善意志とを悟る即ち神愛の悟得、達觀こそ、是れ人生を活かし、人生を充實せしむる潜勢力にぞある。かゝる愛を抱いて天父に面し、人類に面する時、眞に天地人生を我所有となしうる。

此の信仰を把りつゝ、世界を打眺むるとき、眞に樂觀となる。即ち人格的世界觀こそ、人生の幸福、樂觀を齎す基調となる。かゝる樂觀を有してこそ、根柢ある人生を經營しうるのである。

神の最高啓示

宇宙間大なる日月星辰より、小なる一草一木に至る迄、悉く神秘に包まれて居る。吾人の生活にも神秘がある。故に我は他の生活の全體を知悉することは出来ぬ。況して大人格になればなる程、大神秘を有するを以て、之を會得するに一層の困難を覺ゆるのである。元よりスエデンボルグや、ノーバリスなどの神秘は幽玄なるものであるが、更にイエスのそれに至りては、一層深遠なる靈宮の裏に潜在してゐるのである。故に吾人の淺膚なる知識や、經驗ではイエスに對して一定の斷案を下すが如きことは容易に出来うべきことではない。だから、イエス觀は吾人の信仰の如何によるのである。吾人が岸を離れて進航するに従つて海の深に達し、麓を去りて向上するに従つて山の高を覺ゆるが如く、吾人信念の進歩するにつれてイエスの高を認むるに至るので

ある。然し乍ら多くの聖者は偶々吾人に失望の念を興へ、彼を厭ふの心を惹起さしむるに反して、イエスは益々近づき、親しみ易からしむるものがある。聖者を秋の月に譬ふることを得べくば、イエスは春の月である、朦朧たる、而も包容的な、慈母的な温情的な所に彼の偉大なる神秘が漲ぎつて居る。『太初に道あり道は神と偕にあり道は即ち神也この道は太初に神と偕に在りき、萬物之に由りて造らる、造られたる者に一として之に由らで造られしは無し、之に生あり此生は人の光なり』とはイエスの使徒中最も神秘的傾向を帯べるヨハネの唱道する所なるが、抑も道とは何であらうか、道は思想や、精神の發表に外ならぬのである。こゝに我に大なる信念の友ありと假定せよ、而して此の友我に彼の心裡に潜在する思想を露はす所あらんに我は彼の神秘の幾分を了解するに至るのである。『道』は見わざる大靈、隠れたる大精神の啓示である。ヨハネの所謂の道とは、神は常住の道であるとの意義である。神は永遠より語りつゝ、自己を啓示して居る。『語らず云はずその聲聽えざるに、その響は全地に普ねくその言

葉は地の端にまで及ぶ。』自然界の一切は悉く無限にして且つ永遠恒久の勢力の啓示と發展とである。そが勢力は自然の中に、又之を経て今尙ほ所謂の『創造』しつゝあるのである。ダントの神曲は彼の深刻なる信仰を表白し、ミカエル、アンゼロの彫刻は彼の雄大なる理想を露出するが如く、大山、小川、一朵の雲、一滴の水も崇高、森嚴なる宇宙の大精神を語りつゝあるのである。

而して神は嘗に自然界に語り給ふのみならず、人類界にも語り給ふのである。神は過去に於てヘブライ民族に向つて語り給ひしと同時に、他の民族の間にも、彼等を聖き生活と大なる人生とに導かんとして語り給ふたのである。ソクラテスや釋迦や、孔子やは確かに神より鼓吹されたる偉人であつた。だが彼等はイエスに對する先驅者で、預言者であるやうな趣が存する。我國に於ける庶般の宗教は畢竟『野に叫ぶ人の聲のみ』と云ふべきであらう。

二

左り乍らへブライ民族は往古から神に對して熱誠なる憧憬と渴仰と敬虔とを有して居たのである。『かゝる人はエホバの法をよろこびて日も夜も之を思ふ』。あゝ神よ、鹿の溪水を慕ひ喘ぐが如く、わが靈魂も爾を慕ひ喘ぐなり、わが靈魂は渴ける如くに神をしたふ活神をぞしたふ』との宗教的熱情は彼等民族の特有的長所であつた。故に神は特別に彼等に啓示する所が多かつたのである。吾人は何故に一民族は斯る豊富なる心に充ち、他の民族は然らざりしかの理由を知らぬが、其は神の經綸中神秘の一部分として、兎も角へブライ民族間にはモーセ以來幾多の律法者と預言者とが輩出したのである。而して常住永遠の神は彼等に語りて自己を啓示したのである。そこで神の啓示と鼓吹とを文字に刻み出したのが聖書であるが、即ち聖書は默示靈導されたる民族間に起つた特殊の大信念・大思想・大文學家等の聚集せし聖言靈語である。古來世界の民族に對し、又總ての事情の中に於て、常に鼓吹されたる眞理も亦神の啓示に屬するものではあるが、併し乍ら聖書は特別に神の道を包容秘藏せる古今無二の寶庫と謂

はねばならぬと信するのである。

如是く永遠の道は先づ自然に顯はれ、世界の歴史に顯はれ。ヘブライの預言者に顯はれたのであるが、時機の最も熟せる際、自己を十分に示現せんが爲に、一個の大人格に顯はれたのである。即ちヨハネが『道肉體と成て』と記して居る様に、イエスは具體的に其生活と品性の中に父なる神を啓示したのである。神はイエスによりて人間の經驗せる言語を使用し給ふた。之を換言すれば、人類をして神の性質のいかんを了解せしめんが爲に、『獨子』なる絶倫の大人格を出現せしめられたのである。故にへブライ書記者は『神昔は多くの區別をなし、多くの方言をもて預言者により列祖に告げ給ひしが此の末日には其の子に託りて我儕に告げたまへり、神は彼を立て萬物の嗣とし且つ彼を以て諸の世界を造りたり』と云ふて居る。

三

而して『此は我が愛子なり』との聲が、天よりイエスの上に祝されたこともあつ

た。實に彼は天父の聖旨に適える愛子であつたのである。だが吾人は一種の双子のやうな境遇に介在して居る。人間の半面を見れば神の子らしき、イエスの友らしき、仁者、義人の末らしき所あるも、其半面を見れば非基督的な、肉體的な、獸我的な、罪の子たる面影があつて、聖者の前に立つことの耻かしさを覺ゆるのである。人生の半面に苦き、闇きものゝ存することにつきてダンテは『巧言令色 凡て我にありては意味なき形骸のみである。媚態婉姿も我にありては心苦しき醜穢のみである。滅亡の子には怖ろしき怒こそ、適當するであらう』と言ふて居る吾人はパウロがローマ書第七章に論じて居るやうに、常に肉と靈との戦をなし、或時は神に屬し、或時は惡魔に従ひ、或時は天の子となり、或時は地の子となるのである。左れどもイエスは神の生み玉へる獨子で、その人格は神の充ち足れる徳と力とで漲り溢れて居る。ザンダイクの言ひし如く『神の人生』を送りしイエスは神を啓示し、表彰する模型であつた。取かに彼は形體に刻まれたる神靈であつて、天父の像を顯現せんが爲に人間の生活を確

る必要があつたのである。

左り乍ら耶蘇の生涯は天父の性質の全體を顯はすことは出来なかつたのである。韻文の表面に現はるゝ所のものよりも、詩人の心裡により大なるもの存するが如く、美術の背後に作者のより大なる意匠の潜むが如く、イエスの背景たる神は更に洪大無邊なるものである。而も愛や忍耐や、敬虔や 眞理や 聖き感情や 永遠の生命やイエスの中に發揮せられて、神の顯現たることを認むることが出来る。神は永久に綿々として自己を啓示して居る。即ち自然界に、歴史に、預言者の間に、最後にイエスの大人格に顯はれたのである。

扱イエスの『パーソナリティー』と人間の『パーソナリティー』との差は、只だ單に程度の差なりや、將た種類の別なりやとは吾人の深く考究すべき神秘の問題であるが、吾人イエスの愛を有せば、乃ち神の愛を有するのである。吾人イエスの義を有せば、乃ち神の義を有するのである。吾人イエスの歡喜を有せば、乃ち神のそれを有するの

である。由來吾人の心はイエスに感應し、イエスの心は天父に同交して居る。而して吾人の忍耐、希望、純潔、正義、仁愛はイエスのそれに均しくイエスのそれは天父のそれと逕庭の存する譯はないのである。故に吾人は宇宙の創造は單に神の自己を擴張するの手段で漸次其方法を開展しつゝ、遂に人類界に於ける最高至美の産物たるイエスを降し、ことを信するに躊躇するを要せぬのである。

四

然らば則ち宇宙の創造之を他言すれば神が自己の意志を擴大する巧妙なる進化的攝理は、ベツレヘムの馬槽中に終結を告げたのであらうか、さうでない。蓋しイエスは只だ單に神は如何なる者であるか其の性質はどんなものであるかの理を吾人々類に暗示せんが爲めにのみ出現した一時の方便でないからである。イエス自ら曰く「我は門なり」と。「我は良き牧者なり」と。「我は羊をして生命を得且つ豊かならしめんが爲なり」と。こゝに門は開かれたのである。而して人類は之を出入するの特権を興

へられて居る。而も其の門戸や縦横無礙の門戸である。イエスは門である。神は彼を経て人間に入り、人間は彼を経て神に入るのである。こゝに於て神と人間との交通は自由自在となつたのである。而して吾人は彼を通じて鼓吹せられ、啓示せられ、獎勵せらるゝのである。贖罪の解釋に種々あるも、畢竟吾人々類がイエスの人格を實現して、吾人の生活に彼の化身を認識するに至らんことであらう。即ち天の父が其子に顯現せし如く、イエスが吾人の間に顯現し、一切の人類が神徳を奉體、諦得し、柔和、謙遜にして、而も崇高、森嚴なる生活に達することが神の目的にして、又吾人の救であるのである。更に之を約言すれば、神はイエスの中に自己を啓示し給ひしが如く、イエスは吾人々類の中に自己を實現せんことである。吾人の生活に於て、人道の存する所にはイエスが存在し、イエスの存在する所には神が嚴存し給ふのである。而して人類は永遠に向上發展しつゝあるのである。ブラウニングは這般の消息を斯ふ言うて居る。

新らしき生命を歡び

五六

「神は其の人格に於て、

自己の創造を

自由に行動する所の

完き詩人なり。

斯て神は萬有の中に内住し

微小なる生命の發端より

最後の人類に至る迄

創造の目的、生命の完成は

實現せられたり。而して

人類は造られたり。

萬有悉くその目的を備ふ。

左り乍ら完成せられたる人に於て、

神に向て歩を進むるの傾向は、

更に新しく始められたり」と。

かくて神の創造律は宇宙人生の間に行はれて居る。既往數千年間に實現された其廣

大なる攝理は、將來の大發展を豫想せしむる者がある。一切の生命の根本は神である。一切の勢力の源も神である。創造發展は神の目的で、又神の意志の產物であつて、萬有は其の意志に服従して居る。吾人が宇宙の自然律と呼ぶ所の者は畢竟神の習慣に他ならぬのである。吾人は彼によりて生き、働き將た存在することあるは明白なる事實である。吾人若し彼を離るゝ時は、吾人の生命も、存在もなく、又た歌ふ鳥、咲く花、游泳する魚なきに至りて、天地人生は枯木死灰となり了するに至るであらう。眞に一切の善眞美、正義、至誠、仁愛の諸徳は彼れより流出し、又鼓吹せらるゝのである。物質界に於ける發達と等しく精神上の發達も亦神の分與する生命に其の秘訣を有して居るのである。而してイエスは世界の歴史に於て神の最高啓示なるが、その連続せる啓示は基督教の歴史に於て著しく實認せらるゝのである。

以上の所論を概括せば、神は自己を人類、間に顯現し、道なる神は其創造を通じて語り、其預言者により、又ナザレのイエスによりて、最も能く語り給ふたのである。

神の最高啓示

五七

『我を觀し者は父を觀したり』イエスの姿を見る者は天父の聖姿を仰ぐのである。かくて天地創造の始より現代に至る迄、神は塊の如き吾人々類をして、イエスの像に聖化せしめんが爲に、あらゆる方法を用ひさせ給ふのである。神は常に外部の生活に於て語るのみならず、内部の靈通に於て吾人に語り給ふのである。吾人は神の中に住み、神は吾人の間に宿り、神と人類とは常に語り且つ交はりつゝあるのである。何人もこゝに生の神秘と價值と歡喜と發展とが漲つて居ると信せざるを得ぬのである。何人も此の自覺の増進するに従つて一步は一步よりもイエスに接近しつゝあることを認めぬ者はないのである。

詩人に映れる基督の幻象

(ブラウニングのクリスマス・イズ)

英詩人中宗教的信念に厚かりし者は、誰なりやと尋ぬるに、先づミルトン、テニソン、ブラウニング並にウォルツウォース等を列擧せねばならぬと思ふ。而してミルトンは人間の罪惡に戰慄し。テニソンは靈魂不滅の信念を高調し。ブラウニングは神の愛を鼓吹し。將たウォルツウォースは自然の畏敬を提唱して、彼等各自の長所を發揮せしが、就中ブラウニングは他の詩仙に卓越して精神問題を指導し、普通神學者の議論よりも、一層多大の満足を前世紀の英國人士に貢獻せし觀を呈せりと云はれて居るのである。彼れ詩人としては措辭の甚だしく晦澁にして、獨白體たるの感なきに非ざるも、而も彼が秀逸せる智能と洞察力を以て人生を批評し、時代の思潮を解釋せし點より觀察すれば、彼は大詩人たると同時に大思想家として仰ぐべき人物であらう。

其神に對し、人間の靈魂に對し、人生其物に對して懐ける穩健なる信念、其の高潔純粹なる愛の憧憬心等は物質的、懷疑的苦痛を抱ひて惱み、悲み、傷みたりし前世紀の英國人心の要求に應せし一大福音であつたのである。

吾人が今茲にクリスマスを祝せんとして述べんとする彼の『基督降誕節の前夜』なる詩はキリストの神性と且つ神を禮拜する事柄に關して彼れ詩人自から經驗せる歴史を描寫した物語である。

詩人は最初吾人に汚れた、裝飾のない、不恰好な非國教會の禮拜室に於て、何さなく俗っぽい、執拗な嫌はしき禮拜者の集會を紹介し。次にローマの聖ペテロ教會に於ける祭壇、香氣、耶穌が十字架の像、神々しき建築、壯なる音楽によりて禮拜するところの群衆を紹介し。最後に青白き、魔の様な鼻をした、頰骨の高い、瘦せぎすなセルマンの教授が大學の講義室に於て蒼鬚の老學生等に向つてクリスト論を講じて居る光景を紹介して居る。而して詩人は容易に宗教的満足を見し得ざりしも、遂に禮拜に大切なる方法は靈と眞と愛に存することを認め、而して全力を注いで神を愛するのが、地上に於ける人間の最高目的であることを歌つて居る。此の詩は懷疑と不安とに襲はれつゝある現代人に取リ、確かに何ものかを暗示し、啓發する所あるを信するのである。

一、教會を訪ふ

田舎の教會の近邊に彷徨ふて居た一人の懷疑者が、平常教會にゆく氣もなかつたのに、或る暴風雨のクリスマスの前夜其の會堂内に避難を求めて入りたる所、そこに集つて居た會衆は酷だ冷淡な待遇を與えましたのです。そこで其の禮拜堂も、會衆も、説教者も、將た禮拜其ものまでも悉く懷疑者に一種不快の念を催うさせたので、彼は心平かならず、急ぎて堂外へ逸出したのである。

しかるに宏大にして又新鮮なる自然は彼に靈覺を與え、諸の天は神の力と愛とを語るところがあつたのである。

『幼時我れ常に諸天を仰ぎ望みたり、

天體の宏大無邊なるを探究しつゝ、

神こそ顯はれたる力を認めたり、

尙ほ我が心中に於て此處にも亦た

神の高貴なる愛の賜物ありて、

詩人に映れる基督の幻象

自然と齊しき證據を認めたり。』

神は人間を創造し給うた。人間の諸能力中力と愛とは最も大切なものである。而して愛の中に表彰されるところの力のみが、無限者の適當なる理想である。如是の啓示は彼に向つて人間の愛は神のそれに靈通するものであり、又その愛は死によりて終る者でも、滅する者でもないてうゝことを確信せしめたのである。

『土塊の中に棲むある虫は、

此の世界に於て愛なき神より、

更に神聖なることを我敢て言はまほし。』

『否、地上一切の華觀麗相中、

愛ぞ人生唯一の善と見られたりき、

地上紛争あるにも拘はらず、

愛はたえず生長しつゝあり。』

かゝる精神の昂然たる間に、遙に不思議なる姿が現はれ出た——虹の如き——

『輝けるもの、畏るゝことなき、

死滅なきもの 宏大にして完きもの、

天より天に伸張しつゝ、

我れ彼の背姿を見しのみ……………』

此の虹の頂上から彼に背を向けて人體を具えたる怪物が浮んだのである。この怪物は或る態度にて先刻教會の禮拜を輕侮した不遜なる彼を棄て給はぬことを暗示したのである。此に於て彼の氣質はまだ練磨されないけれども、その心は正直にして教會の禮拜が與ふるものよりも、もつと能く無限の愛と共に交通して居ることを辯疏するや、是は受容れらるゝところとなりて、怪物は全く顔を顯はす次第となつたのである。

……………
彼はその前に跪いて、その衣の裾を握り。一切の人類は心靈的美と眞理とを以て主を禮拜すべきことを要めて居る。

二、ローマに往く

詩人に映れる基督の幻象

彼れ此度は甚だ異なる光景に移されたり。彼は靈に引かれてローマにぞゆく。そして聖ペテロの莊嚴なる大會堂前に携へられたのである。彼れたとひ其の堂内に入らざるも、外壁を透して有り／＼と内部の立派な藝術的美觀を認め得たのである。そが内には蜜蜂の其巢に群がるが如く、數多き會衆で充されて居た。やがて鐘の音に驚かされて會衆は一齊に跪き始めた。そうして犠牲的禮拜は會衆が恍惚として深甚なる死黙を守れる間に執行されたのである。

しかし乍ら彼は此のローマにも同情を表して居らぬ。而もローマは從來或る眞理を把持して居るに相違ないのである、が何故にその禮拜に於て『靈』の活動なきか。よしんばそが犠牲の中に古風な精神が残つて居るにもせよ、キリストの齋らせし新らしき愛とその感化力は、之を高め、之を潔め、之を靈化するものあるべきである。而してこの愛の存する所、この徳の宿るところには必ず主の嘉納し給ふ禮拜が行はるゝものである。

三、ゲッチンゲンに往く

彼れ又靈に引かれて、此度は理性にさめるゼルマンのゲッチンゲンあたりの教室に移された。此處にて彼は大學教授からキリストの神話に關する講義を聽かされたのである、即ち教授はクリスチャン神話の起原に關する研究を述べて、學生等の觀念を一新せんと試みしが其の結論は斯ふである。

『キリストは人よ、眞實なる人よ、

其が事業は功德ある人の努力なりき、

又其の弟子等に向つて十分なる保證を與へぬ、

.....
之を聽し所の者よりは

他のものに信じられぬ。

かくて彼は件の批評家の講義を點檢し來りて復習し始めた。即ち批評家はキリストを承認するも神としての彼ではない。然らば則ちキリストは智識上優者の地位を要求

するやいかん、他の教師等は智的に偉大なるものもありしならん、しかし乍ら『神と一也』と主張し、要求して『重要なる蹟』を與えたるものは彼の前にも、後にも、一人もない。然らば彼を測るにはその民族の尺度を以てしてはならぬのである。

更にキリストの善の源は何處なるかを惟へ、或は自得のものであつたか、或は神が之を鼓吹せしものであつたかは問題である。若し單に道德的天才の結果でありとすれば、吾人は發見者としてハーベエーの如く、詩人としてシェーキスビーヤの如く等しく彼を賛嘆すべきであらうが、人はキリストを禮拜することの出来ないのは勿論のこと、又道德上絶對的最後の權威者と認むることは出来なくなるのである。もし彼の善が神の賜物であるならば、其の賜物以外に、之を賦與せる本源を尋思せねばならぬ次第となる。孰れにしてもキリストをして人類の支配者たらしむることは單純にはゆかぬのである。尙ほ又キリストは自らその品性を見よ、善を信せよ、正義を信せよ、眞理を信せよと言はずして、而も本來生命の主なる『我を信せよ』と宣ふたことを惟は

ねばならぬのである。

『賜物よりそが賦與者を仰ぎつ、』

濁水より大流を、

有限より無限を』

又批評家の態度に於て矛盾があつた、と云ふ譯は暫らくキリストの神性てう眞珠を碎くは碎いたもの、聽者に向つてその破片までも悉く取除き去ることを命じなんだからのことである。即ち『その全體が眞珠にあらざるも、實に眞珠なり』その信仰を把持しつゝ家に歸るべきことを命じたからである。

『家に歸りて我れ斯く實驗せし』

此の神的人物を拜せよ

總ての人々が彼の前に歩みしよりも

寧ろ彼の後に歸依するところの

彼に向つて断えず景慕せよ』

四、靈の譴責

詩人 映れる基督の幻象

かくて靈の譴責を受けたる彼は、是まで自分の指導者であつた靈の衣を見失はんとするに至り、神は其の冷淡無頓着なることを誠しめ給ふたのである。

固より神を禮拜するに最良の方法があるをうして人間は其の最良法を發見しなくてはならぬ。之を發見するのが地上に於ける人間の爲すべき最大努力にして又最高目的である。

『禮拜の最良法こそ

人類の要する唯一のものなれ、

我をして之を發見するに、

努力せしめよ、而して

之を發見せし時、我々の友にも

亦た其が部分に與かる

工夫を凝さしめてよ』

五、基督の衣の裾を握る

やがて彼は再び靈の衣の裾を握ることを許されたのである。そうして彼が再び元の禮拜堂に歸りし時、醒むるに至り、説教者はその説教を終つた。元よりその説教は上乘なるものには非ざりしも、而も説教者は神の豫言者である。其の事實の前には批評の餘地は存せぬ。生命の水は尙ほ彼によりて此の世の小杯に給與せらるゝ。而して之によりて生命は支えらるゝのである。

『裂目より滴る最も清き流は、

乏しきものにて

多少神の賜物にあれば

跪きて之を飲むは良し』

之を要するに詩人謂えらく、ローマの教會は外觀も、制度も、燦然として藝術上缺く所なく、形式上整なはざる所なきも、禮拜に最も大切なる靈と眞とを有して居らぬ。ゼルマンの大學はキリストに關し、其の歴史に關して智識に豊富なるもの存する

かくて靈の譴責を受けたる彼は、是まで自分の指導者であつた靈の衣を見失はんとするに至り、神は其の冷淡無頓着なることを誠しめ給ふたのである。

固より神を禮拜するに最良の方法があるそうして人間は其の最良法を發見しなくてはならぬ。之を發見するのが地上に於ける人間の爲すべき最大努力にして又最高目的である。

『禮拜の最良法こそ

人類の要する唯一のものなれ、

我をして之を發見するに、

努力せしめよ、而して

之を發見せし時、我々の友にも

亦た其が部分に與かる

工夫を凝さしめてよ』

五、基督の衣の裾を握る

やがて彼は再び靈の衣の裾を握ることを許されたのである。そうして彼が再び元の禮拜堂に歸りし時、醒むるに至り、説教者はその説教を終つた。元よりその説教は上乘なるものには非ざりしも、而も説教者は神の豫言者である。其の事實の前には批評の餘地は存せぬ。生命の水は尙ほ彼によりて此の世の小杯に給與せらるゝ。而して之によりて生命は支えらるゝのである。

『裂目より滴る最も清き流は、

乏しきものにて

多少神の賜物にあれば

跪きて之を飲むは良し』

之を要するに詩人謂えらく、ローマの教會は外觀も、制度も、燦然として藝術上缺く所なく、形式上整なはざる所なきも、禮拜に最も大切なる靈と眞とを有して居らぬ。ゼルマンの大學はキリストに關し、其の歴史に關して智識に豊富なるもの存する

詩人に映れる基督の幻象

も、衷情を以て神を禮拜する底の信仰に最も適切なる高き情操に缺けて居る。田舎教會の説教者は無學であり又其の會衆は非文雅であるの誹は免かれないけれども、天地の主なる愛の神は禮拜の形式よりも、智識よりも、愛と眞とを要求し給ふが故に、愛の神は田舎教會の中に宿り給ふのである。而して禮拜者は愛と眞とを以て神を禮拜するるのが適當なる禮拜の方法である。又クリスチャンの啓示を一概に神話と看過し去る場合には其が權威も、光輝も減却して仕舞ふ。成肉の基督は本來『生命の主』なりとの信仰を確實に有することが大切である。

天才と品性

沙翁とイエス

カーライルをして印度帝國はあるも可、また無きも可なるも、而も吾人はシェークスピアに代りて可ならんや。印度帝國は早かれ晩かれ去ることあらんも、しかし乍ら沙翁は永久に吾人と偕に存せん。吾人は到底沙翁を棄つる能はずと云はしめた沙翁は英國ウアーウィック州アボン河畔のストラトフォードに生れた。即ち彼の五十三年間の生涯は——一五六四——一六一六——我邦足利の末織田信長の始め、徳川二代將軍に亘る時期であつたが、十八歳の頃家庭を造り、廿一歳の頃生計上の必要に迫られ、かつ立身出世の道を求めてロンドンに行つた。

かれ郷にありし日、貴族ルーシーの鹿を盗んだとか、首都に出る前、學校教員を務めたとか、或は法律家の書生になつたとかいふ傳説あるも確たる史實に徴することは

出来ないのである。遮莫れ、入都数年の間に俳優となり、劇の作者となり、やがて劇場の持主となりて、其交遊の間に愛重せらるゝに至つたことは、殆んど疑を容るゝ餘地がない。そして四十五歳の頃、郷里に隱退し、五十三歳を以て逝けるが、三十有七の作品は、此間に産出されたのであつた。

曾てエマソンはいつた『沙翁唯一の傳記家は沙翁其人である』と。寔に彼の一生を知悉することは頗ぶる困難なるも、恐らく當時無月謝の小學校に於て遊び、少許の拉典語や、希臘語などに加へて修辭學を學んだといはるゝ。そして更に聖書を學んだことも多くの人々の認めんとするところである。英國の史家はいつた『英國は或る書の人民となつた。其が書物とは聖書のこゝこである。當時聖書は英國人士の尤も親炙せる唯一の書物であつた。聖書の一般に公にせられた當時に於ては、チョーサーの著物以外、英語を以てかゝれ、かつ實際に使用された歴史も、小説も、詩歌もなかつたのである。かくて聖書の英國人士の性格上に及ぼせる影響は深甚なものであつて、之と比

儔すべきものがなかつた。こゝに於て該國民の性質はおのづから變化を來し、洵に全國民は聖書的となつた』と。かゝる時代に生活せる沙翁が、聖書に負ふところの多かつたとすることは強ち不自然な推測ではなからう。即ち左に列擧する平行的言句に據りて彼がいかに聖句若くは其精神に通曉せしかを窺ふことが出来るのである。

和平を求むる者は福なり。(太五〇九)

地上に於て和平を求むる者は福なり。(第二ヘンリー六〇二〇二)

神に於ては其一をも忘れ給はず。(路十二〇六)

雀の落るにも特別なる攝理あり(ハムレット五〇二)

爾の聖言は我足の燈火我路の光なり(詩百十九〇百五)

神は我望、我助、我導及我足の燈たらん(二ヘンリー六〇二〇三)

爾は我磐、我城なり(詩卅一〇三)

神は我らの城なり(一ヘンリー六〇二〇一)

人を恕せ然ば爾曹も恕さるべし(路六〇三七)

神は我を恕し給ふが故に我は彼を恕さん(リチャード二〇五〇三)

一日の苦勞は一日にて足れり(太六〇三四)

其日を完うすれば足れり而して其終局は明也(シーザー五〇二)

眞理を購へ 之を賣ること勿れ(箴廿三〇二三)

汚穢の時を賣りて神聖なる期を求めよ(サンネット一四六)

爾曹を憎む者を善視し(太五〇四四)

爾を憎む所の其等の心情を愛育せよ(ヘンリー八〇三〇二)

善を以て惡に勝つべし(羅十二〇廿一)

聖書の教訓により神は我らに惡に向つて善をなすべしと命じ給へることを彼らに

告よ(リチャード三〇一〇)

其の愛する者を懲しめ 希十二〇六)

其の悲哀や天の賜物也、其愛する所を懲らす(チセロ五〇二)

人各聽くことを速かにし語ることを徐くし怒ることを徐くすべし 雅一〇一九)

各人に汝の耳を貸すべし、而も汝の言語を出すなかれ 各自互に責むる所あるも

汝の判断を慎むべし(ハムレット一〇三)

又た家己に悖て分争は、其家立つべからず(可三〇廿六)

オ、若し汝此家に逆ひて此家を建つれば最も禍なる分離を證するに至るべし

(リチャード二、四〇一)

神を敬ひて足ることを知は大なる利なり 提前六〇六

清貧と満足とは富也 此の富あれば足れり(オヤロ三〇三)

(“The Bible in Shakspeare” に據る)

如是く沙翁はエマソンの所謂大なる負債者にして、彼が聖書の知識に乏しからざることを裏書するに足る。そしてまたエマソンはいつた『沙翁は圓滿な人間であつて他

人に話しすることが好きである思想や、人物を蒸發する腦を有つて居た』と。かるが故に沙翁は其作品中宗教家のごとく、或は神學者のごとく、或は道學者のごとく現はれたのである。實に其學校教育から云へば極めて貧弱なりしも、而もその天才は非常なる者であつた。そして沙翁は宗教をとき、道德をとき、罪惡をとけるも更に人生を談じ、現世を論じ、實生活を語ることに於て一層悉しかつたのである。即ち萬事具體的に眞理を象徴せる彼は、いかなる詩人よりも、尤も多く現世の事情に知識を加え、かつ光明を投じたと謂はれてゐる。沙翁が一般的詩人たる本領はこゝに存するのである。此に於て沙翁の描寫せる人物は一々活躍者となり、一般に對してヲセロにしても、リアにしても、ロメオにしてもハムレットにしても、クロムエル、ナポレオン、ワシントン以上に心意上、道德上に實際力ある要素となつて居る。

かくて沙翁の三大長所は、第一人間の性質を創造することであるが、其著作中に六百人の種々異なつてゐる所の人物を描き出した理由は此にある。第三想像力に富むこ

とである。第三話すことが巧妙なりしことである。即ち彼の作物を讀む時、いかに彼が想像の力を活用せしか、またいかに雄辯であつたか、會得せらるゝ。『氏は圓滿な人間であつて他人に話しすることが好きである。即ち思想や、人物を蒸發する腦を有して居た』といつたエマソンの言は當を得て居るのである。

由來沙翁の描寫せる人間は、あらゆる人間を代表し、活躍せしめてゐる。即ち彼の歌ふ聲は悉く人間の聲を表白し、そして其の描寫に巧妙なる實際以上に達して眞に迫まつてゐるのである。固より人間は古今に通有する性質を具へてゐる。人間は本來單位である。沙翁は大なる天才を以てかゝる單位、同一性を尤も微妙に世界に紹介したのである。即ち彼は圓滿なる常識家たると同時に深刻なる、宗教家となり、聖化せる道人たると同時に、沈痛なる悔改者となり。英雄を凌ぐ丈夫漢たると同時に優美なる婦人となり。深邃なる哲理者たると同時に、奸惡なる俗人となり。高潔なる善人、君子たると同時に、非道無智なる惡人となつて人類一切の代表者、傳記家であつたので

ある。

左り乍ら沙翁は天才であり、藝術家であつて、決して品性の人でなく又人格の人でない。かるが故に彼は我々彼の作物を讀む者に多大の感興を與へ、衝動を惹き起すことあるもしか我々の内面的、精神的生活に向つて不斷の生命を與へ。不休の向上心を鼓舞しない。即ち彼は我々に處世上の豊かなる智識と光明を與ふるも、我々に偉大なる生命と活力と權威とを與へないのである。洵に天才は宏大なる預言者的先見と眼孔とを以て天地及人生の秘義を闡明する大なる『發見者』であり。また眞理を綜合し、同化し、應用し、實現する『發明者』である。しかも人格を建設する上に於て、人心の創造を希求する上に於て、活ける勢力たり眞の動機たることは出来ないのである。由來人類の精神界に二個の王國が儼存してゐる曰く『天才の有する智識の王國』曰く『品性に屬する心情の王國』である。そして前者に屬する多くの天才は無意識にして光を發し、無自覺にして道を説き、無人格にして行動を演ずる。之に反して品性は

意識を以て進み、自覺を以て表はし、人格を以て活躍する。左り乍ら天才必ずしも人格を具えざるに非ず、また天才悉く無意識の行動を演ずるには非ざるも、而も品性の大なる所には必ず大人格伴なふ、また大人格の中には必ず偉大なる意義存し、そして偉大なる意識には必ず活ける生命洋溢し、燃ゆる心情充實する。即ち件の意識と生命と心情とを以て活躍し、奮闘し、一切の者を感化し、激勵せずんばやまざるの概を示すのが所謂品性である。

かくてイエスは、一方天才を代表する第一人者沙翁と異なりて、常に意識的に、人格的に、一切の生活を表現したのである。即ち『われは道なり、眞理なり、生命なり我に由らば誰にても父の御許にいたる者なし。汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん』との大自覺と大確信とを以て堂々世に向ふたのである。如斯く眞摯な大膽な主義を以て世界の心靈界に君臨せるイエスに由りて鼓吹せられた道念の標準と生活の理想とは、實際其頂點に達しがたきの感を懐かしむる程であるのだ。『さらば汝

らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ』とは、仰げば彌々高し矣の感が起るのである。

そもく偉大なる品性の所有者、イエスは自己の全生涯をあげて世界人類のために捧げたのである。洵に其生涯は光榮あるものであつた。そして天才よりも、更に偉大なるイエスの品性はいかにして實現せられたるか。そが光榮ある品性を形成し、樹立せし所の纖維はそもく何物であつたらうか。使徒パウロは之を『愛の哲學』に於て巧妙に表白した。乃ち一切の智識や、學問や、經驗などにも卓越して尊い所謂愛こそ、之を形成せる唯一の秘訣である。蓋し天才はパウロの所謂御使の言を語り、預言する能力あり、すべての奧義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば數ふるに足らないのである。即ちイエスは不朽の愛を以て自己を形成し、之を以て人心に接觸し、之を以て萬古に活動し給ふが故に、いかなる天才と雖も亦イエスの許に來りて救を要求せざるを得ないのである。

由來天才の資を具ふる者も 往々人格上、道德上缺陷なきにあらず。かのベーコン卿のごとき大天才と雖も、かゝる缺陷を曝露せる事實は謂ふまでもなく 古今品性の修養なき天才ほど信頼しがたいものはない。國家の尊嚴を傷け、社會の秩序を紊し、家庭の神聖を汚し 個人の品性を惡化する者 修養なき、品位なき、小天才 小才子、小利巧な輩儕より酷だしきはない。此種に屬する肌合の人々の爲す事は 早晚自己破滅の運命を招くに至る他なきは我々の戒しむべき點なりとする。政界と教界とに差なく、人格なく、品位なく、修養なく、反省なき手腕家、活動家などが、自他相互に意料外に出づる結果を齎らす例は 世上に尠少ならざる次第なるが、之れ畢竟自己の片々たる才氣、手腕に頼りて、神意を伺ひ、人心を察し、更に時代の趨勢と個々の事情とを明識する所なき缺陷から來る顯象なりと謂ふべきであらう。我々は元のカイザルウキルヘルムを憶ふごとに此感が起り、そして彼に類似する傾向の存する者も亦かゝる悲哀を催さしむることを認むるのである。世上の小ベーン 小ウキルヘルムたるも

の大に反省すべきである。此に於て我々は品性なき修養なき天才の賤しむべき、嫌ふべきを思ふと同時に、品位あり、修養ある人格の極めて敬すべく、愛すべきことを惟はずには居られないのである。

大人格イエスは天才を指導し、學者、教師を鼓吹し、そしてあらゆる人類を高貴ならしむる使命を有する即ち文化の指針者であり、人生の批者であり、思想の監督者であり、生活の擁護者であるイエスは個人を淨化すると同時に、社會、純化し、國家を上進せしむる使命を有する。世界は彼の力に由て高く擧げられ、人類は彼の恵に由て救はるゝのである。

如是の使命は眞に偉大にして崇高である。國家に興敗あり、人類に榮枯あるも、イエスの品位には千古、萬古變ずる所がない。所謂『愛は長久までもたゆることなし。されど預言はすたれ、異言はやみ、知識もまたすたらん……』げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり』といへるパウ

ロの言は眞理を穿てるものありと謂ふべきである。

之を要するに沙翁は大天才を以て出現し、悉く周圍の滋養を吸収して我が血となり、肉となし、生命とした。そして彼は綜合的達觀と直覺とを以て人間の秘密に通曉したのである。『ユニバーサル・ポエツト』たる本領はこゝに存する。人類の生活を巧妙に代表せる所以はこゝに存する。遮莫れ『我もし地より擧げられれば萬民を引て我に就しめん』と宣ひしイエスは、永遠に亘りて人類を支配し給ふのである。

最近の世界は一般的信頼を以てウキルソンの理想に感謝したこともあつた。又ロイド・ジョーシの聰明な智力と絶倫な手腕とに對して期待したこともあつた。そして又フォシユ元帥の軍事的卓越に向つて尊敬を拂つたこともあつた。しかも今やいかん。世界は曾て彼等を謳歌したのであるが、今や事實は之を裏切りつゝあるものゝごまく見ゆるのである。

嗚呼。智識よりも、哲學よりも、天才よりも偉大なる愛の權化たるイエスは讚美す

『神の強大なる御子、不朽の愛よ』

イエスの創造力

由來人類が所有してある種々な貴重なる藝術品の中、殊に尊ひ、聖いものは、即ちイエスの御姿を描寫した物であらうと惟はるゝ。そして古今其の數約八十六七種類と稱せらるゝとのことである。かゝる莫大な聖畫が、悉く其特色を表現してゐるのである。即ち十二歳の時、宮詣の際、神殿に於て學者達と大切な宗教問題を論議せる場合を描いた物を初めとし、病める者を癒し給ふた場合や、鞭を執つて神殿を潔め給ふた趣や、羊を背負ふて居給ふ所や、燈を點じて之を手にし給ふ所や最後の聖晚餐の畫や、ゲツセマネに於ける神の苦痛の祈禱や、十字架上の悲痛、莊烈な光景や、將た昇天のすが／＼しき姿など、各々其意義と特色とを象徴してゐるのであるが、しかも此らは一部分のみを表彰するに止つて、イエス御自身の使命全體を本質的に、理想的に描寫せる物ではないやうに見ゆる。

そもく、神秘にして實現的な、高遠にして痛切なイエス御自身の一生は、何ぞやといふに、一言以て、之を蔽へば『愛の一生』であつたと謂ひうるのである。即ち仰いで天の父を愛し、俯しては人の子らを顧み、殊に人類の罪の束縛より解放して自由ならしめんとする愛に燃えて手の舞ひ、足の踏む所を忘るゝまで、あつたのである。

由來人類を脅し、惱し、苦しめてゐるものは、罪と無智と貧乏との三姉妹であらう。此等の三姉妹は、常に相提携して吾人の生活を煩はし且つ向上の途を遮つてゐる。件の三姉妹の中、所詮罪てう醜き姉妹が、尤も罪業の深いものであつて、イエスは之を征服するに當り、最も努力し給ふたのである。即ちイエスは人類の尤も苦しんでゐる罪を根本的に艾除根絶せんとする愛の努力を惜しみ給はなかつたのである。

さて數十種乃至數百種の聖畫は、顯著な若くは無名な藝術家に由て以て描かれたのであつて、それくイエスの愛の一生の側面のみを寫せる次第は云ふまでもなきことながら、しかもイエス御自身は彼等に卓越し超絶せる偉大な愛の作家であり、藝術家

であつた。そしてイエスは終始變る所なき愛の手を以て人を導き、人を救はんとしたのである。即ち純全の愛を以て人を造つた藝術家であつた。

我らヨハネ傳記者の傳へてゐる『地にものかけり』との記事を読む時、爰に古今獨歩の藝術家の面影を偲びうるのである。此の地にものかくことは、古代の風習で、其事に關係しないことを示す態度である。が我らはイエスの態度について靈眼を開き、心耳を聳て、物外の深意を會得すべきである。我ら『めしひ』に關する記事（ヨハネ傳九章）に就くと『彼に由て神の作爲のあらはれたためなり』とあつて、人生の不幸艱難や、失敗や、手落などに對して我らの當然遂行すべき義務に關する暗示が認めらるゝのである。『めしひ』の不幸に目を掩ふて去らざりしイエスは、今茲に記されてゐる不幸な惱める婦人に對しても亦た袖手傍觀以て冷淡視するに忍びなかつたのである。即ちイエスの前につき出された件の婦人は、穴の中にも逃げ込みたき窮地に陥りつゝも、一道の光明を認めて活路を開くに至つたのである。

由來モーゼの律法は、かゝる婦人に對して容赦なく殺す力となり、權威となつてゐたのに反して、イエスの恩寵は、洩れなく活す力となり、慈愛となつてゐる。イエスの慈眼に觸れ、愛腸に抱かるゝもの、何人か其慈愛に漏れることがあらうぞ。此に於て『我もなんぢの罪を定めず』との慈愛を含める權威の言葉が流露した。また『神の其子を世につかはし給へるは世を審判んとに非ず彼に由て世を救んがためなり』との實現となり。そしてパウロの『されどキリストは我らのなほ罪人たる時、我らの爲に死たまへり、神は之によりて其愛を彰し給ふ』との實驗が豫想されてゐる。

曾て數百年前、イタリーのフロレンスに、立派な宮殿があつたが、今日では博物館となつてゐる。其の建物は永い間普通の獄屋に使用されたこともあつた。此の建物が博物館に改めらるゝ際には、随分修理に苦心されたのである。そして此の建物の何處かに大藝術家ジョットの描ける一世一代と云はるゝダンテの肖像が置かれてゐるとの傳があつた。かくて三人がかりで、此處、彼處の壁などを調べて後、漸く或特別な

一室の壁畫に於て、驚歎すべき傑作、ダンテの姿を發見したとのことである。洵に一人の罪人をも見捨てぬイエスは。いかなる機會をも逸し去らぬのである。即ち渾身の愛を以て人類に奉仕せるイエスは、最も微小なる罪人の罪を赦すと同時に、聖き者に向上せしめんとする愛を表はし給ふた。イエスが地にもかける手は、意外にも愛の筆となり、靈の『ブラツシユ』となつてゐる。漠々たる紅塵の巷を彷徨ふてあらゆる罪過失に塗れて、夥しき汚點や、瑕痕などを留めて居る魂を洗滌し、若くは弟子の足をも濯ふことを厭はざりしイエスは、『落葬』や、『係蹄』にかけて獲物をうることは正しい獵師すら屑しとせざるに、之にも劣る學者とパリサイ人らの同情なき、心なき、苛酷な、残忍な態度とは全く異なつて、浮世の塵埃に超越すると同時に、傷める、惱める、悶へる、悲しめる魂を、救ふたのである。そして婦人の心に、碎けた眞なる、善なる、美なる或物の輝けることを認めて居た。何等形に於て見るべき所なき一個の石塊を取つて堂々たる預言者の面目、眞に迫まる底のモーゼを創造せるはミケル・アン

ゼエロであつた。醜き墓の頭にも眞珠ありと歌へるは沙翁であつた。そして狗子にも佛性ありと喝破せるは佛陀であつた。而も藝術家や、詩人や、佛陀に優りて、更に理外の理を直覺し、物外の意義を達觀し濁れる江河よりも、澄み渡れる細流を愛し、不透明なる寶玉よりも、輝ける小砂利を顧み給ふイエスは、たしかに非凡な異常な藝術的創造力を藏して居られた。即ち此創造力が、イエスをしてミケル・アンヂエロが未だ曾て夢想しなかつた。そして沙翁が未だ曾て穿ち得なんだ所の藝術を産出せしめたのである。

吾人イエスの聖跡を辿りて、カルバリー丘上に、英雄的な、男性的な行爲を顯せるその英姿を仰ぐ時、こゝに『力』と『眞勇』と『義』と『愛』との表現を認むる。又ヘルモン山頭に於て、超世的な神秘的な榮光に輝けるイエスの變貌を仰ぐ時、こゝに『美』と『聖』との具體化せる靈姿を認むる。またスカル井邊に於て、サマリヤの婦人に對する光景を憶ふ時、こゝに無限の靈泉を湛えて人類の心靈的飢渴を癒し給ふ生

の實現者の姿を認むる。またガリラヤ湖畔風なく、波なき詩境に於て、數千の群れを相手として空の鳥を指し、野の百合花を擧げて千古の眞理を暗示せる態度に於て、こゝに時代と環境に超越せる眞の詩人の姿を認むるのである。更に我らはスカルの井邊に於て、かくも創造の妙技を發揮して卑しき婦人を向上の一路に導き給へるイエスの此にも亦身をかゝめて地にものかきつつ、言外に妙しき神韻を傳ふる眞の藝術家の姿を認めずには居られない。即ち人類を罪より救はんとの熱誠を有せるイエスの愛は、新しき人を造らんとする創造力となつて顯はれたのである。

由來藝術家に要するものは、創造者たる力量と、物を理想化する手腕と、之を巧妙に配劑する工夫とであらう。イエスは此等の要素を所有して居たのであるが、就中理想化する魅力に至りては、殆んど端睨すべからざるものがある。即ちイエスは、物を靈となし、形を實となし、俗を轉じて聖と化し、平凡を變じて偉大となす創造力の所有者であつた。我ら傳へきくに、上野公園の一隅に置かれてゐる西郷南州翁の銅像は

何處となく佛顔を表現してゐるといふ。そして其理由をきくに、件の銅像を造つた作者は佛師であるとのことである。我らは所詮自己を隠すことは出来ない。我らの心は或は言語に或は生活の形式に、或は日常の行爲に表現せらるる。即ち時として談話の中に、時として思想の中に、また時として無意識の間に、そして更に事業の上に自己を刻み出すのである。

曾てペテロがカヤバの庭に於て、恐怖と不安とに襲はれながら、イエスの行末を案じて居れる際、傍に立てる者、ペテロに向つて「誠に爾もその黨の一人なり、蓋はなんぢの方言なんぢを顯はせり」といへること、我らは到底自己を欺くことは出来ない。名利を愛する者は、自から其生活に之を表はし、權勢を好む者も亦自から其生活に之を顯はし、そして人は到底自己以上に、自己の影を大にすることも、麗はしくすることも、理想化することも出来ないのである。

如是く佛師はおのづから其作物に佛らしき姿を痕むること、そして人はおのづか

ら其方言を包み隠し得ざるがごとく、何人も自己の心や、理想や、思想などを意識的に、無意識的に表彰しないものはない。即ち宇宙の大理想、大生命、大光明たるイエスは自己を與へて以て、人類を理想化し、自己を捧げて以て、境遇を美化し、靈化し、創造し給ふたのである。寔に人格は人格を生み、生命は生命を生み、愛は愛を生み、力は力を造つてゆく。

印度思想は宇宙の現象を否定の上に論理せられた悟道解脱の大提唱である。寂滅爲樂は其が理想である。瞑想的内省的觀念によつて以て、之に到達せんとする手段を有する。之に反してユダヤ思想は事物肯定の上に立つ大能の攝理に對する絶対奉仕の信仰である。即ち改造と創造とは其理想であり。回心と健闘とは其手段である。そして回避によつて現實より自由を得、斷滅によつて平和に達せんとするのは印度思想の特色とする所である。また健闘によつて理想を現實にし、再生によつて以て人生を改造せんとするのはユダヤ思想の特徴である。そして一は智見に依つて脱し、一は情意に

依つて再生するのである。結局佛陀は亞細亞を柔和にしたが、基督は歐洲に向上更に向上の大理想となつたといへるヘフデングの論旨は、この間の消息を洩らせるものと目せらるる。即ち建設と改造と再生と向上とを理想とするイエスの精神は、大にしては世界を創造し、小にしては個人を創造する力となるのである。此に於て刻下病める世界及世界の心霊は、彼に依つて以て再び創造せられんことの切なる要求を有してゐる。

イエスの理想から顯はれた人類即ち彼の創造せんと努めた人格は、福音書に於て種々な相を示してゐるのであるが、先づ一般に向つて試み給ふた所のものは、所謂心の貧き者、哀む者。柔和なる者。義を慕ふ者。矜恤ある者。心の清き者。和平を求むる者等の追求者であつて、此等の追求者をして天父の完全をあこがれしめ、之を理想として進ましめたのである。

愛の懷から生れ、そして愛を以て一生を終始せるイエスは、今茲に周圍から捨られ、

脅かされ、さいなまれ、迫られて死地に陥つてゐる憐れな女性を救出して救し、勵まし、慰め安かならしめた。即ち己の理想し、創造せんとする心の貧者哀む者、義を慈ふ者、將た心の清き者たらしめんとする愛腸を傾けて「婦よ、爾を訴へし者は何處へ往しや……我も爾の罪を定めず、往て再び罪を犯す勿れ」と宣ふたイエスは無限の權威と慈愛とを啓示すると同時に、我らも亦此等の兩者を該有して世に向はねばならぬことを暗示せらるるのである。

かかる力と愛と美との籠れるイエスの勇姿を單なる想像の『ペン』を以て描き出さんには、餘りに至難の業と謂ふべく、従つて我ら日も夜もこれをおもふに如かざることを信するのである。

なんぢらは我を誰と言ふか

横看成嶺側成峰。

遠近高低各不同

不識廬山真面目。

只緣身在此山中

此は廬山の真面目の識りがたいことを歌つた有名な詩であるが、嘗に廬山のみでなく、我邦東海の天に巍峩としてゐる富岳の姿にしても御殿場邊で看る姿と大宮邊で仰ぐ姿と甲州の盆地から眺める姿と信州の山地から雲間に認むるそれらの間に、所謂遠近高低各不同で、多少の差異を表はすことは事實である。人物觀についても廬山や、富士山などに對すると同様で、容易に眞の面目を看破することは出来ない。孔子は『莫我知也夫』といひ。又『知我者其天乎』と嘆息したが、人は自己よりも高き人格者に對すれば對するほど、容易に測り知ることが出来ないのは當然である。

由來イエスは人の子等より區々に觀られ給ふた。當時の淺薄な民衆の觀察は暫らく

措き、直接せる使徒からさへも眞の面目を會得せられ給はなかつたのである。近代に於て夥しくイエスの傳記は表はれたのであるが、それ／＼見方が違つてゐる。即ちストラウス一派の觀察とサンデー教授のそれとは異なり、また浪漫家のルナンのそれと教授シーレー卿の『エツケ、ホモ』とはおのづから異なつてゐる。此に於て哲學者がイエスを觀る時、何處となく哲學者らしく描き、詩人が彼を觀る時、何處となく詩人らしく、そして社會運動者が彼を觀る時、何處となく社會運動者らしく、それ／＼描寫せらるるのである。かるが故に眞にイエスの面目を知悉しうる者世に稀なりと謂ふべきであらう。

イエス在世の當時、イエスはカイザリヤ、ピリビの途上、世間の人々は人の子を色々に呼んでゐるやうだが、しかし爾等は我をいひて誰とするかと仰せられた際、氣早やいペテロは『なんぢはキリスト活神の子なり』と答へ奉つた。(太一六の十三以下)まに其のちイエスは弟子達が自分を離れゆく有様を御覽になり、十二の弟子に向つてなんぢらも

なんぢらは我を誰と言ふか

亦去んと思ふやと仰せられた時『主よ我儕は誰に由かんや、永生の言を有てる者は爾なり、又われら信じて知る、なんぢは活る神の子、キリストなり』(約六の六)と即答したのもペテロであつた。しかしながらイエスの危機に際してペテロは三度もイエスを拒んでゐる。ペテロがイエスを眞に會得するに到つたのは、イエスの復活後のことであらう、そこで吾人は當時稚氣満々であり、かつ浮沈の断えなかつたペテロのイエス觀よりも、深みのあつたヨハネと確信の強つたパウロのそれの方が、より多くの共鳴と感動とを與ふるやうに感じられるのである。

使徒ヨハネの大なる使命を簡潔にいへば、永遠の神が人類の父でありそして神の子たるイエスは、永遠のキリストであり、そのキリストが、天籟の福音を地上に齎したといふ點に存する。之と同時にイエスは罪なき生活者であり、かつ不斷の祈禱をされた方であつて最も聖なる『生』を人類に示し給ふたことを示して居る。即ち『人が世界に向つて寄與しうる最善の物は聖き生活の力である』ことが啓示されたのであ

る。『我が來るは羊をして生を得、かつ豊かならしめんためなり』とはイエスの生活を立證してゐる。

イエスがニコデモに對して新生を教へた所以も『聖き生』を享有せしめんがためであつた。當時のギリシヤ人は知識をたのみ、ローマ人は武力をたのみ、そしてユダヤ人は律法を恃んでゐたのであるが、而も彼等は聖く生くることは出来なかつた。人が聖く生んとするには謙りて自分を神の前に投げ出す覺悟がなくてはならぬ。かるが故にイエスはニコデモに向つて再生を説かれたのである。さはれ『それ道肉體と成て我儕の間に寄れり、我儕その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り』(約一の四)『永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣ししイエス、キリストをしる是なり』(約一の三七)此等によりて稍やヨハネのイエス觀は窺はれるやうに惟はるるのである。

次に使徒パウロは、ヨハネがイエスの尊い、聖い生を示し、そして其生が人類の生命であることを教へたに對して、イエスの尊い、聖い死を説き、そしてその死がまた

人の力であることを教へたのである。『われに言の智慧を用しめ給はず、これキリストの十字架の虚しくならざらん爲なり。それ十字架の教は沈淪者には愚なるもの我儕救はるる者には神の能たるなり』(ローマ一)『我儕は十字架につけられしキリストを宣傳ふ即ち此はユダヤ人には礙く者、キリシヤ人には愚なる者なり。然と召れたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にもキリストは神の大能また神の智慧なり』(同一の二)此にパウロのキリスト觀が認めらるる。パウロはキリストの十字架を斯様に見た。たしかにキリストの死及十字架は神の愛の象徴と見らるる之に依りて宇宙及び人生の間には、己の身の恪かるるをも物ともしない隠れた偉大な犠牲者の潜めることが暗示せらるる老ひたる婦人の顔面には、幾多艱難、苦勞の耐えられたことが描かれてゐる。キリストの十字架には凡ゆる人類の罪を赦すのみならず、更に只管ら人の子達の健在を祈る親心が現はされてゐる。曾てボヘミヤの流浪人の女にして一旦畫伯ジンゼンドルフの『モデル』となつた彼が、十字架のキリストを信するに至り、『我は爾のためにかくなせ

り、爾は我が爲に何をなせしぞ』この言葉に感激して病にも死にも恐れなかつた其信仰が、遂にジンゼンドルフ伯をして熱心なモラビヤン派の中心人物たらしめたのも之がためである。十字架についての解釋は種々あらんも、そが根柢には動かしがたき秘義が存し、勢力と生命とが包含されてゐる。十字架なき信仰に力なき理由は此に認めらるるのである、

要するに一方ヨハネの觀たキリストは充實した、圓熟した聖き生の實現であり象徴である。他方パウロの見たキリストは献身して犠牲となつた貴き死の體驗であり、表現であつたのである。我らは寒き冬の日、冷かな土中に埋れて根を張りそして凡ゆる霜雪の惱みに堪へて、やがて純潔な姿と馥郁たる香氣を齎らす今日此頃の梅の花を見るに付ても悲しみ多かりしキリストの生死に偉大な意義の含まるることを想はしめられ。殊に死即復活の眞理が學ばしめらるるのである。

頃日世に公にせられた武者小路實篤氏の『耶蘇』は多少人々の注意を惹きつゝある

がごとし。著者は理想家で『ローマンチスト』で、文藝家で、そして九州に於ける新しき村の『バイオニニア』である。かかる個性と理想とを有する著者の観た『耶蘇』も、吾人に取りて全然縁遠き者ではないやうである。先づ著者は序文に於て「この頃になつてやつと耶蘇の偉さがわかつたやうに思ふ。耶蘇の云はれたやうな生活を送ることが人間の理想的生活である」と云ふことを感じて來た人間はその通りの生活が出来ないでもそれは仕方がないが、それを自分で耻ぢなければならぬことを知つた……耶蘇の神は自分の神だ、人間の神だ」と云ふことを知つた。耶蘇の云ふ通り生きるのが、最も神に愛される道だと云ふことを知つた。それは實に神と共にゐることであり巖の上に家を築くことである」といつて自分の立場を明かにし。それより福音書に據り、順次口語體に或は翻譯し、或は批判し、或は感想を附してゐる。

著者はイエスの奇蹟については無頓着な態度を表はし『今の自分には奇蹟は用はない。奇蹟が行へても耶蘇は耶蘇だが奇蹟が行へなくても耶蘇は耶蘇だ』といつて奇蹟

に重をおかず、彼の人格を第一に置いてゐる。更にまた耶蘇の死については、「かくて耶蘇は死んだが、耶蘇を愛する人々の心の内に耶蘇は更に強く、神々しく復活した。人々は今更に耶蘇を愛し、信じないわけにはゆかなかつた。十字架の死はさう云ふ人々にどの位、強い印象を與へたであらう」といつて主觀的に耶蘇の復活をみてゐる。又著者は耶蘇の祈禱について斯ういつてゐる。「神の意志をはつ切り知るものでなければ、かゝる祈りの言葉は出ない……耶蘇の精神がわからずに、此祈りの言葉を本氣になつて云へるだらうか。祈りの借り着、それはおよそ馬鹿氣たものである。こゝで耶蘇は祈りの文句を教へたのではなく、我々が神に要求すべきもの、及びその時の我々の心の用心をとかれたものとして見る時、其處に恐ろしく深い眞意が感じられる。『殊に我々新しき村の人にとつてはこの祈りの言葉の内に重大な暗示があるのが感じられるであらう』と。

著者は終りに斯ういつてゐる『耶蘇を自分は神とは思つてゐない。いざと云ふ時、

神と合一した人だと思ふ。ある時の耶蘇は實に神そのものだ。耶蘇の言葉は、神の言葉だ。之以上の言葉は人間の口からあふれ出ることが出来ないと思はれる、かゝる言葉がいざと云ふ時に、すぐ出る耶蘇の心は、神の如き心である。自分はその深さ、その本當さ、その權威におどろく。彼の内に神があらはれず誰の内に神があらはれやう。彼こそ神の子である。獨り子と云ひ出した人の心がわかる。

『我らは今も耶蘇の教を眞理と思ふ。神を愛することと、隣人を愛すること、この二つのことを眞に知らうとするものは耶蘇の教をきかねばならない。』

『耶蘇は、神の國を最も求めた最大の人である。神の國とその義しきを求めることが人間によつて最も必要なことである。』

要するに著者はいふ迄もなく所謂『クリスチャン』ではない。が、耶蘇の人格の偉大と其力の強さと愛の深さを認め、常に彼によりて鼓吹を蒙りつゝあるイエスの一種の徒であつて神の國を去ること遠からざる底の一人と謂ふべきであらうが、未

だ廬山の眞面目は認められてゐないやうに想はる。加之、新しき村の實現に日夜努力しつゝある著者に耶蘇を引離すことの出来ない密接な關係を有する永遠の問題及び救ひの問題の閑却され居ることは自然の結果とはいへ、酷だ物足らぬ心地がする。

現代のキリスト

謂ふまでもなく、キリスト教は、史的宗教にして偉大な進歩發展の事蹟を留めてゐる。そして其歴史は終始一貫してキリストを中心とする。此キリストから種々な神學說や、教理や、信仰箇條などが案出さるゝも、畢竟するに、偉大なイエスの人格を闡明し、解釋せんとするに過ぎないのである。即ち一方に於てイエスの天父に對する精神と他方に於てその人間に關する態度を説明せんとするに當りて、或は教理的に、或は哲學的に、或は實驗的に、之を描寫する方法を異にして居るが、しかも人類社會の活力、生命の根柢たるイエスを領會せしむる手段に外ならぬのである。かるが故に神學說や、信仰箇條などがイエスを造りたるに非ず、却て其人格を宣揚せん爲に此等のものが生れたのである。そして活ける其感化は彼に關する區々の教理や、認識から來るのでなく、全く彼の人格其者から溢れ出づるのである。

由來イエスに就て二様の觀察法がある。即ち實際的に見るのと理想的に見るのことである。之を換言すれば則ち史上のイエスと信仰上のキリストとである。しかし乍ら吾人イエスを單に史上に於てのみ認めんか、餘りに人間的、肉的に思惟する弊竇に陥り、又彼を單に信仰に於てのみ仰がんか、餘りに超自然的、出世間的に傾きて、人間の達し難き天上に祭り込んで仕舞ふ缺陷が現はれる。吾人は此間の調和を得なければならぬ。さあれ、吾人は深く基督教の眞理と其中心たるイエスの人格とにつきて、充分な知識と實驗とを有するに非ざれば、鮮にイエスを領會すること能はざるは明白なる事實である。

吾人は新約書及び教會史を通してイエスを仰ぎ見んか。即ちユダヤのニコデモに現はれたイエスも、サマリヤの婦人に現はれたイエスも、將たガリラヤの漁人等に現はれたイエスも、又アウガスチンや、フランシスや、ルーテルや、ウエスレーや、エドワーズなどに現はれたイエスも、唯た獨りの救主なるが、しかも彼等は悉く同一様の

救主觀と經驗とを得なかつたのである。於此乎吾人も亦二千年以前の教徒及び其の他の人々と同一程度の信仰を有し能はざるものあるは、當然の次第なるが、しかも何人もイエスの人格の崇高にして卓越せる事實を認めずには居られないのである。そして吾人は古往今來史上に比儔なきイエスの人格を仰ぎ視るに當り、イエスを或者の如く人間の想像力の所産となすには、餘りに自然的であると同時に不自然的であり、又餘りに理想的であると同時に没理想的であると謂はねばならぬのである。

由來イエスに關する評論多岐に亘るものあるも、要するに吾人はイエスを基督教の中心となすのみならず、吾人の堅き信仰の中心となし、又彼を眞なる、善なる、美なる者の理想、象徴として仰ぐべき者たるは謂ふまでもなきことである。

イエスは初代に於ても、中世紀時代に於ても、人類一般に必要であり且つ況く現はれたるが如く、現代の吾人にも亦必要であり又現はるゝのである。實にイエスは活ける力、輝ける光、竭きぬ靈泉にして萬人の要求に應ずる無限の愛である。吾人現代は

『イエスに歸れ』と叫ぶよりもむしろギリシヤ人の叫びに共鳴して『君よ我儕イエスに見えんことを欲ふ』てふ聲に和するの必要なることを痛切に感ずる者である。即ち今日の要務はイエスによりて庶般の問題を解釋せんことである。尙之を換言すればイエスを中心として事物を觀察し、そして彼を光明として世界國家、社會及び人生の暗黒なる問題を解釋することが今日の急務なりと信ずる。かるが故に今日のイエスは畫餅の如き物にあらずして吾人の實現、實感、充實、靈能とならねばならぬ。單にホルマン・ハントの描ける后光のイエスにあらずして吾人の實力、活力、勢力、生命とならねばならぬのである。即ち『我來るは羊をして生を得、かつ豊かならしめんため也』この聖旨を實現しなければならぬのである。

吾人顧みるに今日世上多數者の有する生命ほど淺薄にしてかつ醜惡なるものはない。彼等の憧憬し、追及し、懊惱しつゝある所謂生活、所謂満足、所謂快樂なるものは、單に感覺世界に屬する形而下の物多くして、彌々益々心靈の天、理性の地に遠ざ

からんとするのみである。即ち根柢なき生活の爲に『ストラッグル』し、やがて自他破滅を招くべき果敢なき満足のために煩悶する彼等が、果ては人生の岐路に立つて、迷ひかつ狂ひつゝ、意義なき生涯に没頭し終るものある状態は慘又慘と謂はなければならぬのである。

斯る人生の危機に際してイエスの齎らす使命は何ぞといふに、人々の衷心に潜める靈能を喚起し、我等の裡に眠れる妙力の覺醒し來ることである。イエスの力に依りて病める者は癒され、弱き者は強くせられ、失へる者は與へられ、舊き者は新にせられ、醜は美化せられ、卑は聖められ、低は高めらる。即ちイエスは吾人に新しき權威と活力と氣分とを促進する所謂現代のキリストとなるのである。

然り而して現代のキリストは吾人に向つて何物を訴ふるやといふに、彼は倫理的性格即ち人格の發達を要求して居る。『かれ來らん時罪につき、義につき、審判につき世をして罪ありとささらしめん。罪に就てと云へるは我を信せざるに因てなり義に就て

と云へるは我れ我が父へ往によりて爾曹又我を見ざればなり』との言はイエスの使命の一斑を含蓄して居る。世人は罪惡に關する意識を以て時代錯誤の觀念となすも、曾てグラッドストーンをして現代の通弊なりと歎息せしめた此の意識の缺陷につきて反省する所がなくてはならぬ。パウロの偉大なる所は此意識の強烈なる點に存する。パウロの所謂『我は罪人の首也』てふ意識は遂に彼をして聖徒の美を成さしめた。吾人の罪人たり、汚れた者なりてふ觀念ありて、爰に人は贖はれ潔めらるゝ。そしてイエスは吾人の罪惡を贖はんがために、十字架の死を遂げさせ給うた。實に崇高、森嚴、壯烈を極めたゴルゴダ丘上の光景は世界人類教化の大源泉である。そこで過去に於て人類の爲に無上の努力と偉大な奉仕を惜まざりし耶蘇は人類の素朴的自然的物質的性格を一轉して倫理的な性格に化せしめ、更に進んで尊き、靈の生命に向上せしめ給うた。斯くて現代のキリストも亦吾人をして倫理的な性格を完成せしめんとし給ふのである。

吾人更に現代傾向いかに思惟するに當り、世界到處協同的精神の旺盛なることを

看過してはならぬ。そもく現代は交通機關といひ、通商貿易といひ、經濟問題といひ、労働問題といひ、産業問題といひ、將た精神問題といひ、すべて有形の問題も、無形の問題も、善惡孰れに屬する問題も、最早や單に一國若くは地方的の解決のみにて満足する事の出來ない、時代であつて、萬事世界的、共通的に解決しなければならぬのである。殊に三年前歐洲大亂勃發以來著しく此の傾向が顯はれて來た。即ち普遍的、共通的、社會的精神大に發揮せらるゝに至り、此の精神活躍して人類の不幸な状態を救濟せんと試みつゝある。乃ち斯の精神が進んで社會的活動となり、彼等に新しき境遇を與へんとの努力となる。實にイエスはこの精神の創造者、賦與者である。即ちイエスの『愛』は其の秘義であつて之が社會を統一し、人と人とを結合する力となる。そしてイエスは愛の實行者であり、而も權威ある實行者である。『なんぢも我を師と呼び又主と呼ぶ、なんぢこの言ふ所は宜し我は誠に是なり。我はなんぢらの師又主なるに尙なんぢらの足を濯ふ、なんぢらも亦た互に足を濯ふべし』と。こゝに天國の

基礎は置かれ、社會統一の力は與へらる。動もすれば、破壊を好んで建設力に乏しく、分裂を欲して調和に缺けてゐる吾人の生涯及び吾人の屬する社會に於て、之が統一力として結合力として、イエスを要求せざる者があらうか。

如上は吾人古今に亘り、内外を貫けるイエスを人類の生命、統一力、結合力、融和力として概觀せしに過ぎない。要するにイエスは自己の内心、靈龕より斷えず潑瀾たる生命の泉を迸散、湧出して世を沾し、人の渴を癒し、そして其左右に簇り來る者に一種驚くべき變化と生長とを齎らすのである。

斯くて吾人は史上のイエスよりも、信仰のキリストに向つて、一層の渴仰と憧憬とを以て歸依し奉り、そして昨日も今日も、永遠に亘りて變り給ふところなきキリストに聯り、こゝに深甚なる神秘的脈絡を有して、聖徒たるの美果を收めたい。

甦へれる耶蘇の姿を仰いで

ヘーゲルが絶対理想の進みゆく歷程をいひ表はすに、正、反、合、の語を用いたことは謂ふまでもないが、イエスの公生涯を觀てもかかる歷程が顯はれてゐる。ユダヤ人らが歓迎するかと思ふ中に、反動が起り、復た歓迎及び反動となり、漸く十字架の後に、眞の調和と融合とが現はれたのである。特に最後の場面を見ても、エルサレム入城の歓迎が翌日、十字架につけよとの盲動的叫びとなり、昨是、今非、轉た人情の輕佻浮薄を想はしめらるる。そして啻に一般の人々のみならず、反逆者ユダの魔の手はイエスを捕ふるの仲介となり、眞摯なるペテロすら、三たび知らずと背信の聲をあげ、其他の弟子達もおのづから姿を隠すに至り、唯り慘憺たる眼前に、異様な影を投ずるゴルゴタ丘上の十字架あるのみであつた。

教授ブルースのいへるやうに、當時イエスは、パリサイ黨の虚偽の生活や、學者輩

自製の律法などに對して、神の正義のいかなる物であるかを闡明し、それが眞理の本質を立證し、かつ今日に於ても或黨派或團體に見る所なるが善も不善も、是も非も共に人爲的な、不自然的な、不合理な皮相なものとなつてゐた時代の社會道德組織に對しても亦、敢て革新を計り、是を斷行するために自から身を以て明かにすると同時に、差別的 特殊的な階級の誇りのため、捨て、顧みられなかつた人々を愛したのであつた。是に於て敵は凡ゆる手段奸策を廻らしてイエスを攻めた。洵に世界の史上に比びなき人格者が復たなき脅威に面したのであつた。しかもイエスは正當防禦をなさなされたために、一味の黨徒を組むほどの此世の小人、俗物ではなかつた。爲に渠れの態度は獨往千里の概を示した。恚した渠れの惱みは、それが使命を果さんがために自然の結果として起り來つたのである。即ち『生命を全うせんとする者は之を失ひ、我が爲に生命を失ふ者は之をうべし』てふ『バラドッグス』に従ふて自ら正義と眞理と人類平和及び幸福のために尊い崇高な犠牲を拂つたのである。

由來人生に於て、厭ふべきもの、唾棄すべきもの、種々ありと雖も、しかも無知と利己心のごときは、尤も忌むべきものなりとする。現代人の惡しき一特徴は此の利己心に強いことである。即ち件の利己心が、無反省的な、無考慮な主我心となつて醜き姿を吾人の周圍に髣髴せしむる。さはれ、當時ユダヤ人の無知やユダの利己心などが經となり、緯となつて空前絶後の悲劇を演せしめたのである。殊に裏切れるユダの野卑下劣さは背信忘恩の甚しきといふよりも、宇宙間最惡意志の勃發とも謂ふべきであらう。此の最惡意志の跋扈を極むる時、世は暗となり、人は獸となるのみである。吾人は或意味に於て、印度の斷滅哲學、沒我主義を迎へ、シヨウペンハウエルの解脱の道に合せんことを要する。

『萬の事はたのむべからず、あるかなる人はふかく物を頼むゆゑに、うらみかかる事有り。……才有りてて頼むべからず、孔子も時にあはず。徳ありてて頼むべからず、顔回も不幸なりき。奴したがへりてて頼むべからず、かならず變ず。約をもたのむべからず、信有る事すくなし身をも人をもたのまざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。……人は天地の靈なり、天地はかざるこころなし、人の性なんぞ

異ならん。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒是にさはらずして、物のためにわづらはす』

と兼好の説けるにも、理りあることにして、反覆し易き世態と人情に超越し、流轉變化の多き世相を達觀する者ぞ、眞個道德界の勇者にして、また靈界の偉人たるのである。

吾人の周圍には幾多の矛盾が隱顯出沒する。之れがために不安と疑惑と苦痛とを感ずる。曾てローマの勇將シーザーはブルタスのために刺されたのであるが、是は友に裏切られた慘事の極みであらう。また人は管に友より裏切らるるのみならず、自分の情願が實現せざる場合自分で自分を裏切りて自刃の態度に出づる場合がないでもない。即ち朝に光明快活な純眞の理想境に遊んで居るかと思ふも束の間、夕べに暗黒憂鬱な陰府のドン底に抛げらるることを實驗する。

閑話休題。イエスはかかる際失望せしか、卑怯、未練なりしか。否、何事にも未練がましい態度や、不満失望の色や、不安疑惑の聲なく、むしろ、悲劇より喜劇へ、暗

より光へゝ場面が一變して喜びの歌となつた。

『かれらうたを歌てのち

橄欖山にゆけり』

との所謂綽々乎として餘裕ある態度には闇の中にも、輝ける光を抱きつゝ、天父の聖旨を實行せんとする深甚な歡喜が潜んで居たのである。しかも悲みの人たるイエスは『我心いたく憂ひて死ぬばかりなり』と叫び給ふた。曾てラザロの死せる時、また橄欖山頭よりエルサレムを眺め給ふたとき、イエスの眼より涙の進れるを見たのであるが、此の場合に於ける涙は、到底普通人には忍びがたい苦痛の表現であつた、更に『聖旨に任せたまへ』と祈れるに至りては洵に宇宙間、最善の意志の發表であり、かつ最善の努力であつた。

過般某博士は都下の一新聞に、いかにも新思想らしくヘツケル流の宇宙觀及び宗教觀を連載して時代錯誤の甚しきを曝露せるが、斯種の論者の唱道するごとく、果して

宇宙に一大經綸存せざるか、宇宙の背後に果して思想なきか、宇宙及び人生に於て、經綸もなく、また思想もなしとせば、永久的意識や、生命の發展に對する喜ばしい憧憬などのあらう筈はない。しかもトルストイと共に、『次は何ぞや』との叫びは、人類本來の要求であり、希望である。

一旦我らを救はん者は斯人ならんを望を懸けた神の子が、人に捨てられ、傷ましくも十字架に迄磔けらるる矛盾の多き世の中に於て、失望もし、悲觀もし、果ては不信の境にまで墮せるイエスの弟子達は、自から宗教的本能に驅られて將來いかんと考えたことであらう。果して彼らは宇宙に大經綸の存することを暗示せられ、従つてゴルゴタ山頭の光景も神の經綸中に行はれた人類を救はんがためのプログラムの一部分であることが理解せられ、そして宇宙の惡意志の妄動するとき、一旦事々、物々、暗黒と罪惡の姿を取るも、而も最善の意思の勝利であつて、一切は神意によりて動き、かつ之に支配せらるる所以を會得するに及ぶや、今更らのごとく靈の眼が開けてイエス

の甦りを認むるに臻つたのである。所謂る「預言者の凡て言たる事を信する心の遅き愚なる者よ。キリストは此等の難を受て其榮光に入べきに非ずや。二人の者の目瞭かになりて彼をしれり又忽ち其目に見ずなれり。彼等互に曰けるは途間にて我らと語りかつ聖書を解開ける時われらが心熱えしに非ずや」となつたのである。

『今年花落ち顔色改まる。明年花飛び復た誰か在らん。已に見る松柏摧けて薪と爲り。更に聞く桑田變じて海と成るを古人復た洛城の東に無く。今人還た落花の風に對す。年々歳々花相似たり。歳々年年人同じからず。言を寄す全盛の紅顔子應に憐むべし半死の白頭翁。此翁白頭眞に憐むべし』。とは我々の間に、尤も膾炙されてゐる詩で、謂ふ迄もなく、宛轉 曲折、花と人につきて盛衰開謝の理を反覆し、花落ちて復た開くも人は則ち一たび老ひてまた壯なる能はずといふ所謂る流轉變化の相を描寫したのである。吾人はかかる流轉變化の中に、永遠の相を認むる。

宇宙を経綸して居るものは、則ち此の永遠者である。由來東洋人は「永遠の相」を

靜的に見たのであるが、吾人は之を動的に見る。即ちイエスの所謂る我が父は今に至るまで働きたまふ神は活ける神である。活ける神は斷えず活動の神である斷えず自己を分與し、また啓示せんとする神である。そしてそれが目的を實現せんがために、宇宙間に生起する際限なき流轉變化の中にあつて尙ほよく其特性を把持しつゝ働く所の神なのである。その甦れる姿のいかんは暫らく措き、古今人心の永遠の世界、不朽の領土、不變の實在を憧憬し、追慕する觀念はイエスの復活によりて限りなく價值づけられ、意味づけられた。即ちイエスの復活によりて人類は靈的實在に關する證明を與えられたるの觀がある。

由來人類は飽くまで死を厭ふ本能を有してゐて、之に打勝たんとする強烈な傾向を具ふる。従つて生を希ひ、生を樂しまんとするは人類共通の慾求である。下谷電話の四四四番は、普通人の欲しない所から大學病院に使用されてゐるといふこれ四は死と聽ゆるからである。不忍池畔に十三屋といふ櫛屋がある。これも亦櫛(苦、死)を嫌ふ

からである。また死刑囚が減刑されて終身懲役となつて喜ぶのも、死刑の宣告をうけた囚人が、尙ほ鐵窓下の壁に自分の名を刻して喜ぶのも所詮自己の生命を欲し、自己保存を要求する所から露はるゝ顯象である。加之のみならず古往今來、東西民族の文不文を問はず、死後生活の欲求が存して居る。かの熱帶地に棲む印度人が死後蓮花生活を理想し、北極に棲むエスキモーが死後依然として氷の家や脂多き魚肉を理想し、アメリカの土人が死後茫漠たる獵場あるを理想し、回々教徒が未來世に於ても現世的快樂を理想するときには、謂ふまでもなく皮相淺薄の見を免れざるも、而も是等の要求は人類が本來具有する永遠性より胚胎し來れるものあるは容易に否定の出來ない顯象なりとする。

イエスの復活は、人類復活の先驅であり啓示である。之れより人類が死滅を脱して自由の世界に移りゆく門が開かれたのである。即ち吾人の肉體が Transform する機會が立證されたのである。

『それ造られたる者は切に慕ひて神の子たちの現れんことをまつ。造られたるものの虚無に服せしは、己が願によるにあらず、服せしめ給ひし者によるなり。されどなほ造られたる者にも滅亡の僕たる状より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり』—ローマ八、十九—二二—

『そは此の朽つる者は朽ちぬものを着、この死ぬる者は死なぬものを着るべければなり。此の朽つるものは朽ちぬものを着、この死ぬる者は死なぬものを着んとき『死は勝に吞まれたり』……。死よ、なんぢの勝は何處にかある。死よ、なんぢの刺は何處にかある。』—哥前一五、五三—五五

人類が自然の死に壓せられて其まゝに終るとせば、宇宙の大經綸を有する神の失敗と謂はねばならぬ破目に陥る。しかし乍ら何人も全能者の聖業に手落があらうとは惟はない。況して特に此世に遣はし給へる獨子イエスの生涯に於ておやである。吾人は當時無知と錯誤と罪との爲に傷められ、汚され給ふたイエスが、天父の經綸中に、再び新しき、聖き、尊い靈姿に甦りて正義と眞理との勝利を示し、そして生の發展と歡喜とを誇り給ふイエスターの朝を衷情より感謝したいと切望する。

耶蘇に對する本能

『父の我に賜ふものは皆われに來らん、我にきたる者は、我これを退けず。』(約六の三七)
『我をつかはしし父ひき給はずば、誰も我に來ること能はず』(同四四)

創世記第一章の記事によると、神天地を創造するに際して、先づ晝と夜とを分ち水と土とを分ちて後、其の間に饒に生物を生じ、そして諸の生物は各自其類に従ひてつくり。『生よ、繁息よ海の水にみてよ又禽鳥は地に蕃息よ』と祝し玉ふたさある。また『神其像のごとくに人を創造たまへり』とある。我々は此等の言葉の中に、生物はいかなる種族の物にしても、各自其種族の繼續を希求し、擁護し、愛着する天性の賦與されてゐることを認むる。即ち爰に低き生物より高き人類に至るまで、悉く或物を慕ふ本能の深く植えつけられてゐることが學ばれるのである。かるが故に一羽の小鳥にしても、蜂にしても、一匹の蝗にしても、各自の本能によつて生存してゐる。『牛はそ

の主をしり、驢馬はそのあるじの厩をしる』(賽一〇三二)『天空の鶴はその定期を知り、斑鳩と燕と雁はそのきたる時を守る』(耶八の七)とあるのは此理由である。

さて本能とは何人も謂ふごとく自分が未だ經驗もせず、また教育も受けない前から自然に働くところの傾向を指すのである。即ち母鶏が火災などの場合に於て翼の下に雛を擁護しつゝ、自分の焼くるのを厭はぬごとき、また母鯨が漁夫の手によつて其子を捕えられた際に當り、同情の涙をたれて悲鳴をあぐるごとき、往々出來する悲劇であるが、所謂本能は宛がら流露されてゐる。また孟子が人皆人に忍びざるの心あり。先王人に忍びざるの心あれば、斯に人に忍びざるの政あり。人に忍びざるの心を以て人に忍びざるの政を行はば、天下を治すること之を掌上に運らす可し。人皆人に忍びざるの心ありと謂ふ所以の者は、今人乍ち婦子の將に井に入んとするを見れば、皆悚惕側隱の心有り、交を婦子の父母に内るゝ所以に非るなり。譽を郷黨朋友に要る所以に非るなり。其聲を惡んで然るに非るなり』といへる者、所謂本能の本質を描寫してゐる

るのである。古老が天子の名を呼ぶとき、おのづから頸巻を取つて襟を正うせることも亦本能の活躍が認めらるゝのである。

左り乍ら下等動物の非合理的な本能と人類の醇化せる本能との間には、著しき差異を認めずには居られない。勿論その作用に於て類似點を認むべきも。我々は此等の差異を動物的本能と人間的本能と神的本能との三段に分ちうべしと思惟する。そして人間的本能が動物的本能に優れ、更に神的本能が人間的本能に優れてゐることは云ふまでもなきこと乍ら、我々が進めば進むほど、我々の本能の作用にも差異を表はすに至るのである。こゝに於て我々常人の本能とイエスのそれとの間に大なる灣の存することに氣づかるるのである。

イエスの本能の流露は洵に深甚な崇高なものであつた。即ち「我を遣し、者の旨にしたがひ、其工を成畢る是わが糧なり」我父は今に至るまで働き給ふ、我もまた働くなり」わが天より降しは己の意の任を行はんためにあらず、我をつかはし、者の意の

まゝを行はん爲なり」我れ之がために生れ、之れが爲に世にきたれり」との御聲はイエスの天父に對する熱烈にして眞摯な憧憬が表影されてゐる。我々はこゝにイエスの「デバイン、インスタンクト」の美はしき姿を認むる。

左り乍ら我々の内面を顧みるに、未だ眞の本能の働きが顯はれてゐない。曾てエゼキエルは教えて曰く、

『われかれらに唯一の心を與へ、新しき靈を汝らの衷にさづけん、我かれらの身の中より石の心を取りさりて肉の心をあたへ。彼らをしてわが憲法にしたがはしめ、我律法を守りて之を行はしむべし。』(結十〇十九)

『汝等その行ひし諸の罪を棄去り、新しき心と新しき靈魂を起すべし、イスラエルの家よ、汝らなんぞ死ぬべけんや。』(同十八〇廿一)

『我新しき心を汝らに賜ひ、新しき靈魂を汝らの衷にさづけ、汝らの肉より石の心を除きて肉の心を汝らにあたへ我靈を汝らの衷におき、彼らをして我が法度に歩ま

しめ、我律を守りて之を行はしむべし。』(同卅六〇二六、二七)

こゝに肉の心とあるは、石の心に相對していへる言葉にして、人間の心情感情を指すのである。そしてイエスはニコデモに向つて宣く

『誠に實になんぢに告ん、人もし新に生れずば神の國を見ること能はじ』と。またヨハネ傳記者は『彼をうけ、その名を信せし者には權を賜ひて此を神の子となせり。斯る人は血脈に由に非ず、情慾に由に非ず、人の意に由に非ず、唯神に由て生れしなりと道破してゐるのである。またラッセルは斯ういつて居る曰く『靈性は知性の冷嘲的態度に對する一種の解毒劑であつて、本能から生じて來る情緒を普遍化し、それを普遍化することに依つて、知性的批判の鋒を適當ならしむる。そして思想が靈性に依つて力づけられると其冷酷な破壊性を失つて、最早や本能を殺滅しやうとすることがなくなり、反對にそれを淨化し、緩和すべく努めるやうになる云々』と。即ち新に生れることも、神に由て生れることも、將た本能的作用を普遍化することも、所詮本能の

靈化、醇化、淨化を教ふるに他ならないと思惟せらるゝのである。

我々は靈化せる本能を要むべきである。即ちかゝる人はエホボの法をよろこびて日も夜もこれをおもふ』若くはわが神よわれは聖意にしたがふことを樂む、なんぢの法はわが心のうちにあり』といへる聖者の心を以て心となして不斷に『デバイン、インスチンクト』を活躍せしめねばならぬのである。『水鳥の往くも還るも跡絶へて、去れども途は忘れざりけり』ここに其本能が働いてゐる。

我々は神に對し、イエスに對して聖なる、『ホーリー』なる、崇高なる本能を有せねばならぬ。此本能の消長、強弱、多少は、やがて各自の信仰生活に影響を及ぼすに至る。この本能の旺盛なる時我々の生活は自由であり、平和であり、幸福である。即ち神的生命の盛んなる時、上を仰で敬虔となり、周圍に對しては奉仕となり、自己に向つては内心化となる。

基督教の基調

イエスの教は最初から一定の形式を取つて教義に制限された『ドグマ』ではないやうである。かるが故に他の學術のごとく斯様なものであると定義を下すことは困難であらう。しかし乍ら既往に遡れば一千九百年に亘る永い歴史が人類の生活の中に織り込まれたのである。即ちベツレヘムの曉よりゴルゴダの夕に到るイエスの生涯並に復活の新時代に及びそして使徒の活躍せる舞臺を経て、更に教父時代及びローマ教の全盛時代に達し。一轉して『プロテスタント』の天地を齎せるイエスの教は其時代々々に於て取つた形式や、表白の方法は異なるも、しかも偉大なる生命の潮流となつて滔々世界に漲つたのである。そして人類は之に棹して生きて來たのである。即ち人類を活かしたるが生命は、實に大なる勢力である。

イエスは當時『我なほ汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんぢら得耐へず、然れ

ど彼すなはち眞理の御靈きたらん時、なんぢらを導きて眞理をことごとく悟らしめん云々』(ヨハネ十六の十二、三)と仰せられた。またパウロはキリストには『智慧と智識との凡ての寶藏れあり』(コロサイ二ノ三)『汝らは死にたる者にして其の生命はキリストとともに神の中に隠れ在ればなり、我らの生命なるキリストの現れ給ふとき、汝らも之とともに榮光のうちに現れん』(同三の三、四)と言つてゐる。またジエームス教授が『宗教的經驗の諸相』に説いてゐるが如く、宗教的經驗は萬人悉く一樣でない。主觀的經驗に基ける宗教的眞理の表白の形式はおのづから區々に分れる。しかも其目的は或高い尊い永遠の生命を掴まんとする邊に存する。そして其の經驗は個人々々の發達のいかんにかゝるのであるが故に、従つて啓示に關する智識に於て、淺深高下を免るゝことは出來ない。即ち充分に啓示を受くるだけの準備なき者に取りて『所謂、我なほ汝らに告ぐべき事あまたあれど、今なんぢら得耐へず』とは適切な暗示である。

イエスに直接せる弟子達を思ふも其信仰が各自異なつてゐた即ち律法の實現に向つ

て熱誠であつたヤコブの信仰と浮沈は激しかつたが、尙ほ眞摯率直を有してゐたペテロのそれとそしてパウロのやうな活躍は無つたが、しかも深甚なロゴス觀を具えてゐたヨハネのそれとの間には柳は緑、花は紅の趣がある。此に於て我々はヤコブ一人のみに據りてイエスの教を斷定することも出来なければペテロ並にヨハネ等のみに憑りて然かすることも亦た出来ないことは謂ふをまたない。況してパウロ一人のみのイエス觀によりて以て定義を下すことは困難であらう。されば、彼等は各自其一特色のみを發揮し得たと思惟せらるゝ。

さればイエス御自身に就て見んかイエスは一定の哲學や、形式を取つた倫理や、斷定された教理や、傳統的な信條や、因襲的な儀式や、將た人目を奪ふやうな會堂などをもつてゐなかつたのである、況して或者の謂ふが如き貧民を招集して社會運動を企てた方でもなく民衆を糾合して政治運動を試みた方でもない。しかもイエスは事物の中心となり、焦點となつて一切の事物並に凡ゆる場合に生命を與ふる力となつて顯は

るゝことを實驗する。由來イエスは刻下世界人類を擧げて考慮せしめつゝある國際問題につきて何等一言も直接に唱道された跡方の存しないことは謂ふ迄もないが、しかも斯問題を眞個に成立せしめ、實現せしめんにはイエスを中心に立てねばならぬのである。即ちいづれの民族に屬する何人も『然らば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ』と道破せるイエスの精神に立歸らねば所詮徹底的に解釋の出来ない重大な問題である。『余は六十年間、世界及び人間を考察し、研究した末、もしキリストが現代の爲政家となつて國家社會の經營に當らるゝともキリストの精神に依つて建設さるべき途の外、世界人類の不幸を癒す方法のないことを認むると斷定せんと欲する』とバーナード、ショーをして叫ばしめた所以は此に存するのである。さればイエスは事物其物に透入し浸潤して一切を擴充する魅力を具有してゐる。

更に宗教には、教理を中心とするのと鼻祖の人格を中心とするのとの差異がある。即ち前者は創設者の人格を切り離しても其宗教は存し、後者は之れなくして存在する

ことは出来ないのである。儒教を宗教と見るか、いかなの問題は暫らく措き、假りに之を宗教と認むる時、之から發生した朱子學派にせよ、陽明學派にせよ、孔子の名を除却するともそが學派の成立に於て致命傷とはならざるべきも、しかも我々の宗教に於て、イエスの人格を閑却する場合、そが團體の中心は滅亡して仕舞ふのである。即ち儒教主義の學派に孔子なき場合にも、其が存在に影響する所なからんも、基督教の教會に基督なき場合は、忽ち危機に陥る外はない。實に基督は基督教の『アルハ』であり、『オメガ』であるのである。斯教の中心はキリスト、イエスであるのである。

かくてイエスを知ることとは則ちイエスの教を知ることとなる。イエスの教を知らんとするものは、先づその生涯を學ばねばならぬ。その生涯を學ぶ者はその生命に觸れるのである。左り乍らイエスのそれは餘りに神秘にして穿ちがたく、また餘りに崇高にして近づきがたき憾みがある。しかも微小なる我々にも其一端は啓示せらるゝ。思ふにイエスが神子の自覺を抱いて公生涯に入り給ふて後、人間の遭遇せるあらゆる

事變や、危機などに際會し給ふたが、しかも望を失はず、氣を落さず。そしてイエスは當時の有司や、識者抔から依頼されて立た譯でもなく、又民衆から讚美され、共鳴されて活躍した次第でもない。反つて弟子から裏切られ、味方から捨てられ、敵から十字架に磔けられた矛盾と衝突の生涯であつた。

吾人は既に業に、イエスの生涯は一方から見れば矛盾、衝突、齟齬の多かつたことをのべた。しかもその錯綜せる一生を貫徹せる主義があつたのである。即ち其の生活を縦横せるものは、天父に面して、自己に對して、そして他人に對して、確乎不拔の主義であつたのである。

神に對するイエスの態度 はいかにも孝養的で、信賴的であつた。宗教を永遠者に依憑の情操と見たシユライエルマヘルのごとく、全然天父に對する憧憬は強烈であつた。鹿の谷川の水を慕ふがごとく、また嬰兒の母の乳を要むるがごとく切實なものがあつた。そして熱誠以て天父を拜すると同時に、其旨を成さんとする尊い本能が活躍

してゐた。『我には汝らの知らぬ我が食する食物あり』とは其熱心を暗示する。そして之を遂行するに當りて凡ゆる面倒な問題に逢著し給ふたのにも拘はらず、イエスの面前に其光と悦と望とが輝いて居た。一切を天父に委ねて神意を果さんと努力したイエスは、何物にも恐怖し、躊躇する所はなかつた。天父の聖旨を善なりと達観確信し、そして其攝理も亦善なりと達観せるイエスは暗路に遇ても、死の蔭に立つても輝ける所を行く心地ですゝまれたのである。かくて聖旨に非ずと信じた場合に於て、母の仰も、弟子の忠言も斷じて退けたイエスは、之が其旨と確信せる際に當りては、苦杯も甘んじて傾け、十字架も亦辭する所でなかつたのである。實にイエスの天父に對する態度こそ、世々の聖者、義人をして其信する所に向つて進ましめ、闘はしめた秘義の一であらうと惟はるゝ。

自己に對するイエスの道 イエスの性格は一面偉大を示すと共に、他面極めて單純であつた。恰も大山、巨川が偉大な勢力を現はすと同時に單純の趣を呈するが如きは

がある。そしてイエスは内外表裏なき高潔を有し、此の世より生れたる者に非ずして、全く天上より降りたる者の如き姿である。洵に彼は天父の恩寵と自己の努力とによりて三大誘惑の如き試練より救はれたる生涯であつた。そして之をなすに當り、外より強制されたるが爲にあらすして内心より進出したのである。其公生涯は虚飾のない天眞爛漫なものであつた。窮屈な、傳統的な物に囚はれない自由なものであつた。孔子は七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えずと言つたがイエスも内心の自由を獲てゐたのである。何處までもイエスは『インナーライフ』の深かつた所謂『深』の最もよく藏された方であつた。我々は或者の生活に於て見るが如き淺薄な、皮相な、感傷的なクリスチアンたることを避けねばならぬ。内面生活の深さ高さ、長さの具つてゐたイエスの生涯こそ吾人が取るべき模範と思惟せらるゝ。吾人は空虚な、杜撰な教養なき生活を戒めねばならぬ。含蓄深き生活は吾人の希望し理想してやまざる所である。

他人に對するイエスの態度 天父に對してあこがれを有し、自己に對してふかみを

湛へたイエスは他人に對しても亦やむにやまれぬ『ヒュマニテイ』の涙に溢れてゐた。即ち愛の生涯であつて、神と人類とに最も高き、最も大なる、最も善きものを献げた生涯であつた。茫々たる宇宙に無数の人類生活せしと雖も、未だ曾てイエスのごとき偉大な献物を捧げたものゝてはない。世の中には自己を何物のためか提供せんとし、て苦慮するものが無いではない。或者は家族のために、或者は友のために、或者は人道のために、そして或者は人類のために、一身を提供する場合もある。しかも神のために、罪人のために、一身を捧ぐるほど偉大にして利己心なき、高貴にして忘我的な生涯はないのである。

『異邦人の君のその民を宰ごり、大なる者の民の上に權を執ることは汝らの知る所なり。汝らの中に大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり。首たらんと思ふ者は汝らの僕となるべし。斯の如く人の子の來れるも事へらるゝ爲にあらず、反つて事ふることなし、又おほくの人の拯贖として己が生命を與へんためなり』とは尤もよくイエス

自身その眞諦を表白せる言である。所謂『奉仕』の精神は此の事ふてふ言葉から起つて來たことは謂ふまでもない。イエスには人に事ふる精神が旺盛であつた。我を忘れて他人を顧みるの態度が鮮であつた。そして此精神を實現せんとするには自己を神意に没頭することが大切なのであるがイエスには自己犠牲、自己放擲、自己靖献の精神が頗る強烈であつたのである。即ちイエスは自我に打勝ち、利己心に打ち勝ち、そして自己を殺して神意の實現、他人への奉仕に忙はしく活躍せられた。或者は高い處(神のみに目を注ぎ、或者は周圍(自然界)のみに目を注ぐ傾向もあるも、しかもイエスの目は下(社會)に注がれ、其手は民衆に觸れ、そして其足は一般の人類に向ふてゐたのである。

イエスは人生に活動し、苦闘し、やがて天に昇つた。その生活には三つの容積が具つてゐた。即ち天父に對する憧れ自己に對する熱誠及び他人に對する奉仕是れである。彼の人格はかゝる三容積の充實せるものである。『クリスチアン』とはイエスの如

く三容積を充實し、善良なる性質と人類の爲に贖はれた自己を捧げんとする志とを以て親しく天父とイエスとに交はる生活者であらねばならぬ。かくて神は崇められ、人は救はれ、世は天國と化す。吾人がイエスの生活を日用の生活に實現する時、初めて基督教の一端を理解し、かつ體驗する者といふべきであらう。しかるに『クリスチアン』にして此三方の中、一方面をも有たぬ者がある。他人に奉仕する所か、全く自己を完ふし得ない者が多い。現代奉仕の聲は世界に高きも『目には目を、齒には齒を』と云ふ態度は人類の間にも、時として教會の中にも認めらる。吾人は神意の實現に努力し、我内面の深化に工夫を凝らし、そして他に捧げんとする志の彌増に盛ならぬことを祈らねばならぬ。

知遇の宗教

『我は善牧者にて己の羊をしる又己の羊にしらる。父われをしるごとく我も父をしる、われ羊のために命をすてん』一初十〇十四、十五

教會の生活に於て、常に最も多くまた最も高調する所のものは則ち信仰てふ言葉である。恰も此の言葉は我々の生活の『アルパ』であり、『オメガ』であるやうに見ゆる。併し乍ら此の信仰の外に、我々を支ふる何物もないかといふにさうではない。即ち『しる』といふことがある。由來信仰のない知識は理に偏することく、知識のない信仰は迷に墮して仕舞ふ傾向がある。かるが故に件の兩者は我々の生活に大切なる二大支柱である。そして信が知に先達つこともあり、また知が信に先達つこともあり、此等の兩者が同時に並行することもあるのであるが、信と知とは我々の信仰を向上せしむる所の双翼であらねばならぬことは謂ふまでもない。

單にヨハネ福音書のみを通讀しても、例せば『その名を信せし者』(約一の十二)とか、或は『爾曹をして信せしめんが爲なり』(同十九の三五)といふやうに此の文字が信不信に關してザット九十二回ほど使用されてゐる。また『世これを識ず』(同十一の十)とか、或は『永生とは唯獨の眞神なる爾と其遣し、イエス、キリストをしる是なり』(同十七の三七)といふやうに是れ亦知不知に關する文字がザット百廿二回以上使用されてゐるのに氣付かるるのである。是等の對照を見ても兩者の重んぜらるることが認めらるる。由來ヨハネ傳は愛の福音と謂はるるを以て愛は知ること、理解することから生長する。アミエルが『愛することは隱然知ることである、知んことは隱然愛すること、はならぬ』といつて居るやうに、愛の存する所には必ず知が働らき、理解が働らくのである。かるが故に、ヨハネ福音書は愛の信條たると同時に、知の信條、理解の信條とも認めらるる。

由來無知、無識はご恐ろしいものはない。上古、ソクラテスが鳩毒を仰いで從容死についたのも、アテンス人等の無知に因し、イエスが十字架についたのも一面ユダヤ

人等の無知に因し、世々の殉教者達の死も亦之れに因してゐる。今日無知、無理解のために、世上幾多の狂態が演せられてゐる。殊に神に對し、宇宙人生に對する無知、無理解から悲劇が演せらるる。人間が宇宙及び人生の實在者に對して明白な知識、理解を有して居らない時、その生活は宛がら屠所に曳かるる牛や、羊などの態度に異ならないのである。即ち物言はぬ動物のやうに逐はれつゝ、また住家なき『ジブシイ』のやうに彷徨ひつゝ生活する人間は高き或者に對する知識と理解を缺いて居るからである。されば、知んことは考察や、理解や、覺信などを含んでゐる。現代人は無考察、無理解、無自覺なごいふ文字を忌み嫌ふてゐる。最近記者は都下の一大學生と種々な談話を試みた際、彼は孔子祭の講演をきゝまた府下和田山の哲學堂に於けるカント祭の講演をきゝたるも、而も豫期に反して餘りに獲る所がなかつた。そして我々學生は過去の傳統及び既成物に對して反抗心を有し、兎もすれば是等は無考察に放擲せんとする傾向がある。従つて不安懷疑に襲はれ、眞面目になつて教場に於て學ぶ心が失せて

自から困惑して居る云々と陳べた。余は彼に向つて種々な暗示を與へて分れた次第であるが、兎角青年が既成の形式を無考察に附せんとする傾向は警戒すべき顯象なりとする。況んや無察考で事物を攝取せんとするごときは現代人のなし得べき所にあらず。即ち知に飢えて居る現代人は知の追求者であり、憧憬者である。さはれ、我々は更に一步をすゝめて、所謂神知を要し、靈覺を要し、妙智を要する。即ち直覺を以て宇宙の神秘を闡明し、そしてその奥義を認識すべきであらう。是に於て我々は信と知との靈機妙用を期する所がなくてはならないのである。

己の羊をしる又己の羊にしらる即ちしる、しらるる所に宗教は成立し、信仰は向上し、友情は濃かになつて來る。愛し、愛せらるる邊に神人は感應同交しうるのである、先づ人類を知り、そして人類より知らるることを欲し給ふ神は、恰も往古、カルタゴの英雄ハンニバルが、愛兒に親しまれんことを望んで、嚴しき武装を解き、父らしい自然の姿で現はれ、そして愛兒を抱けりと傳るごとき、人類を綠の野にふさ

せ、いこひの水濱にともなふ牧者となりたまふのである。詩篇 者の歌る牧者、エホバはヨハネ傳記者によりて天地を傾倒して人類を愛し給ふ天の父なる神となつて現はれたのである『それ神は其生たまへる獨子を賜ふほどに世の人を愛し給へり』。古來此の言葉に感激せる者、其の數枚擧に遑なきほどである。そして無限愛の本質は科學者の『メス』や、哲學者の「ロジック」などを假りて或は解剖し、或は論究すべきものでなく、一向に直覺の眼を打開いて敬仰し、讚美せんのみである。釋迦牟尼が花を拈出するに弟子の迦葉が破顔微笑したといふが、此の間の消息は絶言亡慮であつて以心傳心の外はあるまい。また支那の伶人伯牙の曲調を理解した者は子期であつたごとき知音の神秘は言語に超越し、言外に横溢する即ち愛と理解とは管に言語に超越するのみならず、階級に超越し、民族に超越し將た國境に超越して活躍するのである。

明治天皇の侍講元田永孚先生の詩に左のごとき七絶がある。

從_レ侍_ニ去春花樹筵_一。

東巡西幸又經年。

今宵歡會誰無_レ感。
 菊滿_二芳園_一月滿_レ天。
 花月相逢此令辰。
 君臣歡會亦何新。
 周文善養應_レ無_レ及。
 御箸分_レ肴賜_二野人_一。
 君王手酌_二菊花觴_一。
 賜_二與老臣_一分_二壽康_一。
 六十衰殘何謂_レ老。
 戲言猶喚_二太公望_一。
 人老年々難_二再壯_一。
 花開歲々幾回新。
 敕言今夜花前宴。
 不_レ愛_二菊花_一愛老臣_一。

此の七言絶句の四首とも君臣の麗はしき情趣が溢れてゐるが、就中、最後の物にそが君臣の誼が表はれてゐる。そもそも此の詩の賦せられたる所以は明治十年十一月、永孚先生が御苑萩の御茶亭に於て陪觀を拜受せるに因る。

『御談話の中御盃を賜ひ、御饌中の魚肉を親しく御箸を以て分ち賜はれり 聖語快活として古今内外の御論談に及ばされ永孚も旨を稟て應答したり覺えず愉快に入りたるに、汝出師の表を吟ぜよとの 敕諭あり、即聲を發して十一二句迄 吟じたるに老音艱澁續き難きを以て後句は辭し奉りたれば、元田 茶 給せよとの

仰せにて侍従試補より御煎茶を給したり、猶又た詩を吟ぜよとの仰せにより正行を詠ぜし自作の詩を吟ぜんと言上しければ宜しと宣ひたり、即乃父之訓銘干骨より至今生活忠烈魂に至るまで聲音如々吟じ畢り、幸にして聲も聯續しければ大に御感賞に入りたり……侍従還を促し奉りければ、今夜は太公望在り 汝患ふるこも勿れこの御諭なり、夜も漸く深ければ侍従又菊圃の夜景燭相映じ 殊更佳觀なり、蓋て御坐を移して暫く御覽給はざる乎と言上しければ菊花の佳觀は明年も亦觀るべし 元田が詩吟は來年其音聲の今年の如くならざるを愛む、朕は菊花よりも元田が詩吟を愛するなりと宣ひたり、右の人々皆々感稱し奉りたるに永孚に於ては只々感泣胸を沾し、養老の聖德實に文王にも超させ給ひしと竊に嘆稱し奉りしなり云々(元田先生進講録より)

一天萬乗の君が一侍講を愛し給ふ趣は所謂菊花を愛せず老臣を愛するの一句に活如として顯はれてゐる。洵に自己の尊貴を忘る所におのづから其尊貴が露はるる。帝王己を忘れて老臣を懷ふ所に眞に謙虚の徳が輝く。此に知遇の美が彩ざられてゐる。此に感激の泉が湧いて來る。此に宗教の萌芽が胎胎する。此に敬虔なる依憑の濫觴が生るる。

己を虚しうし僕の貌をとりて人の如く兄弟のごとくなれるイエスは、眞に徹底せ

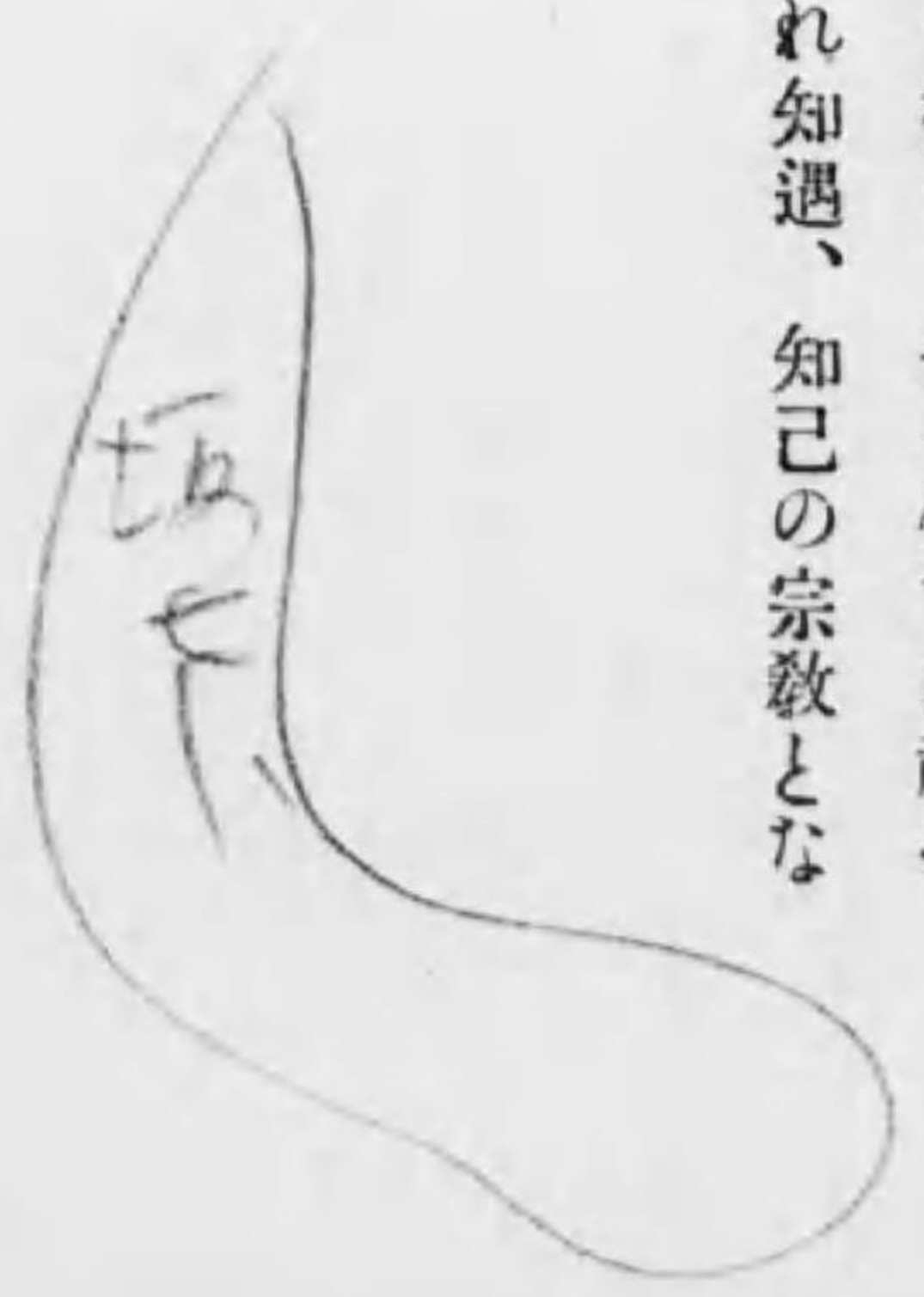
る人間の理解者である。所謂『羊をしる』イエス、人間の理解者たるイエスは狹隘なる愛國者のごとく民族愛に留まらずして宏大なる人類愛の所有者である。此の愛の所有者たるイエスは、渾身の愛を傾けて人類の爲に十字架につき給ふたのである。之より偉大な愛が安くにあらうぞ。『それ義人のために死ぬるもの殆ど少なり、仁者の爲に死ぬることを厭ざる者もやあらん、されどキリストは我らの尙罪人たる時、我らの爲に死たまへり、神は之によりて其愛を膨したまふ』とは何たる尊い犠牲であらう。是れ以上我々に感激を與ふる行爲が、那邊に在るであらう乎。

吾人は昨日を以て平和克復滿四ヶ年の平和記念日を迎へた。流石に英國は皇室並に民衆共に意義ある深甚な記念の集會を催ふしたやうである。思へば人類は未だ眞にイエスの人類愛を理解し、そして實現するに臻つて居らない。人類の精神的向上は牛の歩みのやうに遅々たるの憾みがある。世界の平和、人類の幸福は、之から始まることであらう。

轉じて我國の事情を反省するに、未だ知己、知音の宗教、理解、同情の宗教の實現せざるため、社會に於ても、家庭に於ても、友の間に於ても、種々な矛盾や新舊分子の衝突や、相互の杆格などから日毎に悲痛な出來事が勃發する。所詮愛することは隠然知ることであるてふ愛に根ざす理解と知識との缺乏のためならずとせざるのである。

遮莫。せめて我々の教團の間になりとも、しる、またしらるるてふイエスの心を實現せねばならぬと思ふ。我々の交りは世のそれと異なつて利害、得失に超越しなければならぬ。教會の交りはイエスの交りである。即ち信仰を交換し、祝福を交換し、高き志を交換し、尊き奉仕を交換すべきである。高者高きを忘れ、低者は低を忘れ、強者は強きを忘れ、弱者は弱きを忘れ、そして老へたる者は若かき者を愛撫し、若かき者は老へたる者を尊重し、悉くがイエスの傘下に群がるべきである。かくてこそ眞に From heart to heart となる。然らざればバイロンの所謂 "Solitude" が到處に現はるる

こととなる。孔子の「不_レ患_二人之不_二已知_一患_レ不_レ知_レ人也」心を抱き、先づ仰では神を
知り、俯しては人を知り、そして感應同交の生活を營む。是れ知遇、知己の宗教とな
るのである。



力の宗教

今から約卅年前には、破邪顯正といふ言葉が使用された。是は基督教を邪教、外教と見た佛教一派の人々が攻撃演説などに用ひた所のものであつた。しかし其頃は教會でも基督教の外は、一切の宗教を虚偽と目し我が佛尊して、眞理は全部我が有であつて、一教には之れなしと論じたものだ。執近宗教の比較研究や、科學的、歴史的研究の結果、おのづからかかる極端な考は滅して了つたのである。カーライルがマホメットを辨護し、虚偽の人、宗教を建てしといふ乎。虚偽の人は宗教を建てどころか、一瓦屋だも造ることは出来ないこと破してゐるやうに、虚偽と欺瞞とは、孰れの宗教に取りても絕對的に禁物である。そして誠實、眞純、神聖は、いづれの宗教にも至要の分子なのである。只だそれが淺深高下の如何は、自から宗教の品位に盛衰の岐るる所となる迄である故に、所謂『フアングメンタリスト』的な見解を以て、科學に對しまた他教に對す、こゝは、酷だしき時代錯誤といふべきであらう。最近或集會に於て或派の力な教師は、聖書に徹頭徹尾神の業と確信し、之を鑿して世に向ふべしと挑戰的態度を示されたが、余は坐る苦笑を禁じ得なかつた。

由來すべての宗教には、それ／＼目的、理想、使命がある。佛者は色聲、香、味、

觸_二眼、耳、鼻、舌、身の對照物たる_二の五蘊の執着を蟬脱して洒々落落の人たれと唱道し、儒教の徒は秩序、階級を重んじ、威儀を整へて嚴然たる君子の姿を成し所謂『知者は惑はず、仁者は憂へず勇者は懼れず』底の人たれと高調し更に基督の教は『幸福なるかな、柔和なる者。その人は地をつがふ。』『幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん』。『幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん』。と唱道して人類を神の子たらしむべく慕進に天父を目標けて向上せしむるのである。

吾人は今茲に上叙の三者を比較して批判せんとするものではない。が、洒脱を理想した人が案外煩惱に囚はるゝのみならず、人間性の發達に阻害を醸し、君子を理想した人が形式に墮し、自から義として頑迷固陋な弊竇に陥いた史實は言ひ遁るゝ術はない。即ち前者には根本的に潑刺たる生命なく、後者には無限に向上せんとする希望の伴はざる缺陷を有するやの觀がある。さはれ、我らは『さらば汝らの天の父の全きが如く汝らも全かれ』との大理想は、前二者よりも、於多く、於廣く、於深く、世界人類の

進歩と幸福と名譽と利害とに關するものあるを思惟せねばならない。洵に我々の現實生活は、理想生活に遠く、所謂現實曝露の何々とやらで、悩み、悶え、悲しみ、寂しい生を送つてゐる。しかも傷める惱める、悲しめる銘々の魂が、眞なる、善なる、美なる、愛なる物をあこがれて雲雀が天に沖するやうに飛躍せんと志す所に、人間の偉大な價値が存するのである。

一體、人が夥しく物を所有する邊に、必ずしも人間の光榮はない。また人が著しく物を造つたといふ點にも、それが眞價は伴はない。概して人間は所有を放擲する場合、事物に超越する際に、偉大さが閃めくのである。さはれ、我々微小な人間が『永遠の父』『無限の至高者』を尋ねて日毎日毎順禮者たる姿で人世の荒野、それが試練の山、それが艱難の谷を打越へ、一步は須らく一步よりも高かるべしてふ志を實現する所に、眞個人間の偉大さとそが光榮とが發見せらるる。即ち我々の偉大は『持つこと』もしくは『成した』點のみに存するに非ずして『自己存在』のいかに依りて運命づけられ、

價值づけらるゝのである。經濟學者のミルが「人は満足してゐる所の愚者であるよりも、不満足に感じてゐる所のソクラテスであることを好み、満足なる豚であるよりも不満足なる人間であることを好む」と道破せるは、人間の本性を言ひ表はした眞理であると思はる。現代の浮薄な人々は、兎もすると満足してゐる所の愚者であり、豚であることを好む傾向を示してゐる。是に於て滔々として愚者であり、豚であらんことを慾求する低級な氣分に漾つてゐる。即ち社會の風紀は之がために傷けられ、家庭の秩序は之が爲に破壊せられ、個人の品位は之がために害せられ、そしてかゝる理想の結果はそが事業の政治たるを實業たるを問はず、必ずや腐敗、紊亂を醸さずには居らない。

現代は世界人類が、一齊に生活に不安を感じ、人生其物に懷疑を抱いて「ファウスト的」な生を営みつゝ、眞に深刻な人間苦を嘗めて居る。しかし乍ら眞の宗教的生命を有する者は現代の惡化せる世相を觀ても左程に悲觀厭世の深淵に陥らない。が、宗

教もなく、何等の教養もなき我國民多數の傾向は、吾人の大に注意せねばならぬ不自然な、不合理な状態に於する。昨今位、殺傷騒ぎの現はるゝことは近年に其例を見ない。殊に舊冬には佛教主義に據れる名教中學生同志の間に殺傷事件があり、又復た最近某々中學の生徒が某々學校の生徒を殺害せし如き、更に猫いらずで自殺する者は大正三年以前は、極めて稀有であつたが最近三四年以來、頓に之を用ゆる者が激増し、三年以來猫いらずで自殺せる者三千人を超え、之に未遂者を合すれば五千人を超えるだらうとのことであるが、生に就ての信念もなく、生活に就ての希望もなく浮草のやうに生きて居る彼らは尊い生命を重んじない。かかる悲劇は一方生活の不安に因由する所もあらうが、他方生に對する根本的な自覺を缺く所から自暴自棄に陥る結果ではあるまいか。要するに生に對する欣ばしい憧憬がない。

由來斯教の目的は健全な人生を成し遂げしめ、理想的な人物を育くむにある。宛も詩人が高き天を低き地に齎らす如く基督教は低き人間を、き天に引上げるにありとせ

ば、則ち基督教は高き神と低き人間とが一致共鳴して我らの心理に神の王國を建設するにありと謂ふも不可なきを認むる。即ち神國は神の心と人の心との協力に由りて成立する。それ故に道肉體となりて世に現はれた所に人類の理想が藏さるる。イエスが智慧も身のたけも彌増り、神と人とにますく愛せられ給ふた如く、人類は天と人の前に正しき者とならねばならぬのである。世には形式のみあつて生命なく、藝術のみあつて靈能なく、思索のみあつて活力に乏しき宗教もある。所詮かかる宗教には健全なる理性の發達や、優雅なる情操の流露や、將た堅固なる意志などは認められぬ。さばれ、ア、我れ惱める人哉と悲痛な叫びをあげたパウロが自から神の力を體驗して立つた態度は正に吾人の探るべき態度にして此の力が自己と同胞を救ふのである『即ち我は福音を恥とせず、この福音はユダヤ人を始めギリシヤ人にも凡て信する者に救をえさする神の力たればなり』とは福音によりて『力』を掌握したパウロの衷心からの聲なると同時に我々の體驗となつて煥發さるべきであらう。

吾人試に銀座の十字街頭に佇立して織るが如く往來する男女の外形を瞥見するに、或者は洋服を着するもあり、或者は和服を着するもあり、或者は和洋を折衷したるを着するもあり、而して濃なる色あり、薄き色あり、赤き色あり、黒き色ありてそが千態萬狀奇裝異粉宛がら假裝行列のごとく、一定の服裝もなく、また一定の模様もない。これ我國民思想の個々別々たる所以を表現するものではなからうか。紛然擾然雜然た國民の生活を統一し、そして之に秩序あらしむるには、力の宗教、力の道徳、力の信仰を要する。即ち神の力は是等の力となりうる。世の中の力は、往々殺す力となり、分裂の力となり、破壊の力となるも、而も福音の力は活かす力となり、靈能を與ふる力となるのである。何となれば之に統一の力、融和の力を有する愛を伴ふからである。即ち愛を伴ふ力が人生を創造し國家を復興し、社會を建設し、普く善業を發展せしむる。於是、矛盾と失望とを與へ易い人生は永久に力を要求して止まない。吾人の使命は斷えず之を與ふるにある。

願くは敬虔の民たれ

吾人が森嚴な、崇高な或物の前に立つ時、直に我が心は其自體に惹きつけらるゝのみならず、おのづからそが尊嚴と權威とに對して一種嚴肅な感の起るものにして衷心より畏敬の念の湧き來るのを常とする。そして畏敬、欽仰の流露するに當りては、日頃自分の野卑な心根や、淺薄な慾望や、不遜な態度などは自然に形を潜むるに至るのである。即ち人間の至誠赤心なるものは此の間に發揮さるゝのである。

最近余に深刻な印象を痕して居る一事がある。即ち明治天皇御大葬の當日（大正一年九月十三日）午後二時頃から宮城前の廣場に數萬の學生を初め朝野の人々等が御靈柩を奉送すべく轟しと詰めかけ、さしもに廣き宮城前も奉送者を以て埋められたのである。やがて日は西山に白づく頃となつた。が、偉大な帝王を喪なつて悲しめる、傷める、惱める、而も緊張せる幾萬の心靈は、互に明治の往事を語り、先帝の鴻德を頌

しつゝ、一話は更に一話、一語はまた一語と熱誠感激の度を倍すと共に喧噪を加へ來り、日の暮るに從ふて容易に靜まるべくもなかつた。當時恰も「われヨルダンの地より、ヘルモンより、ミザルの山より、汝を思ひいづ。なんぢの大瀑のひゞきによりて淵々よびこたへ」との感を催ふしたのであつた。

やがて正に八時、二重橋御發輦の合圖に號砲をきくや、數萬の人々は何等の命令も指揮もまたずして、忽ち言語の瀨は變じて沈黙の淵と化し、眞に関として聲なき靜寂の中に悉く直立不動の姿を取り、一齊に恭しく首を垂れて微かに閃めく御靈柩の方に面したのである。洵に澄み渡れる、微風だになかりし初秋の夕、端しなく永遠界の莊嚴を暗示する沈黙と靜寂の風光の眼前に開展された當夜の神秘と森嚴と偉大とは如何にも深甚に我心靈に印象されてゐる。かゝる際はアミエルと共に叫ばざるをえないのである。

『死よ。靜よ。永遠よ。幸福、不死、完全を切望す。人間に取りては、何たる神秘、何たる恐怖の語ぞや

願くは敬虔の民たれ

生命の呼吸我を捨て去る時、明日我は安に在る。此永遠の大問題は、その深甚なる版圖を以て我らの眼前に現はる神祕は左右上下を閉せり。而して信仰こそは此暗黒及び不安の裡、於ける唯一の明星なれ。』

刻下我國民の道德生活は、何人も認むることく、一大危機に迫つてゐる。元より明治時代が智識の攝取と物質文明の建設とに忙がはしくあつた爲、比較的徳性の涵養並に信仰の向上に遅れた結果とはいへ、近頃は一層物騒な世の中になり白晝市井無頼の徒が出没して大膽な犯罪行爲を敢てするやうになつた。此儘に進みゆかんか、白晝も心を突んじて、往來が能きぬやうにならぬとも限らぬ。我々の國家には統一者存するも、國民の道德的方面には、それが統一者を缺き、恰も春秋戰國の状態に異ならざるものありて、國民各自の賤しい諸慾、諸情は何物をも畏れ憚る所なく跋扈し、以て我儘勝手な生活に墮して居る。即ち道德界に中心を失ふて正邪是非を混同し本末輕重を顛倒しつゝ、杜撰極りなき振舞をなすの結果は或は國に、或は社會に、或は一家に、或は一身に破滅を招くの外なきに臻るの不幸を見んも圖り難いのである。是れ畢竟永遠者

の姿を仰ひて茲に絶對の尊嚴と權威とを認めそして之に畏服し 依憑することを知らざるに由るがためである。

孔子は『君子に三つの畏れあり。天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。小人は天命を知らずして畏れず、大人に狎れ、聖人の言を侮る』と曰はれた。洵に志を立て、徳を修めんとする者に取りての黄金律である。更に詩篇の記者は莊重の調を以て『なんぢら慎みをののきて罪をかすなかれ、臥床にておのが心にかたりて黙せ。なんぢら義のそなへものを献て、エホバに依頼め』と。またパウロは『是故に我これを言ひ主に在て爾曹を戒むなんぢら今よりのち異邦人の如く其心の邪曲なるに任せて行ふべからず。かれら心昏き者なり又知るところ無により頑なるに因て神の生に遠かれり。……また爾曹の心の靈を新にし、神に象りて眞理の義と潔にて造れる新人を衣るべし』と。蓋し人にして天命を畏るゝ念なく、臥床にておのが心に自問、自答する所なく、將た我靈を新にするの工夫なきときは、眞の人となりて道德生活を營むことは

能きない。そして一切の悪は、かゝる缺陷より生じて底止する所を知らざるに至るであらう。

由來活ける神に合體せんと欲して努力する聖者と萬有の真相を窮めんと欲して思索する哲學者と天地及び人生を如實に歌はんとする詩人とがある。さはれ、人類が下等動物の生活状態を離れて、漸く生活の水準が高まるに従ひ、人類は臚げながら宇宙人生の間に崇高な或物の在し給ふことを認むる様になり、又自分自身の運命がどんな物であるかといふやうな概念を有つに至つたのである。かくて人類の間には我以上の或物と契合一致し度いと念が燃えて來る。あらゆる努力は之を實現せんとして傾倒されてゐる。遠く印度の釋迦牟尼が妻子珍寶を捨て出家したのも、近く露國のトルストイが榮華を擲ちて田園退き、そして遂に家出したのも之がために外ならない。誰れでも一時的な生活に了らないで、永遠に生き度いといふ深い本能を具えてゐる。此本能が發達すればするほど、強烈になればなるほど、單に『天』とか『道』とか、『無

限』とか、『眞如』とかいふやうな抽象觀念に満足が出来ないやうになり、所詮イエスが直覺し、闡明し、高調した「父なる神」を飢え渴くごこく慕ふにいたるのである。ピリポがイエスに向ひ、『主よ父を我らに示したまへ。然らば足れり』と言へるはあらゆる人類の大要求を道破してゐると思惟せらるる。また懷疑せるトマスも活けるイエスに面接して『わが主よ、わが神よ』と告白するに至りて眞の平安をうるこゝが出来たのも、此にそが理由を見出しうるのである。

遮莫れ、人間は理智の力に於てよりも情意の働によりて、より多く道徳性を完うしうる。そして人間は情意に生きて初めて理智にも生きうる。往古、ギリシヤのデルフアイにあつたアポロの神殿に刻まれた名句『自己を知れ』といへるギリシヤ人等の基調に反して、イスラエルの智者は『エホバを畏るゝことは智慧の根本なり、聖者を知るは聰明なり』と喝破して人類生活の規範を指示したのである。洵に人間は神を畏れ聖者を知ることによりて以て自己を律しうるに至るのである。所謂智能を啓發し、徳

器を成就せよとは、尊い思召にして國民の將に實現すべき理想なるも、しかも神を畏るゝことなしに、無上の權威を認むることなしに、そして衷心から情意に満足することなしに、單に智力や、才能や、理智や、學說などの力のみを以て我々の徳器を成就することは出来ないのである。「知識」を人生一切の基調として出發せるギリシヤ文明が、あれだけ燦爛たるそが光輝を發揚せしにも拘はらず、遂に行詰つて了つたのは之がためであらう。パウロがコリント人等に向つて「智者いづこにか在る、學者いづこにか在る。この世の論者いづこにか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらずや」と挑戰的態度を取れるも之がためである。我國從來の偏智主義教育が健全なる人間を造りえざる所以も亦た之がためである。同時に千遍一律的な、杓子定規的な我國民道徳主義の涵養が圓滿な人間を創造し得ざる理由も亦た此にそが理由を以て出さうるのである。吾人は今更のごとく肅然として襟を正うし我國民の間に天を畏れ、神を敬ふ念の涵養を一日も忽諸に附してはならぬことを痛切に感ずるものである。

近年我が國民道徳の向上發展を期するため、或保守的な宗教學者は國民的宗教を是として普遍的宗教を貶し、且神人同格説を把持して國家の主權者を現人神と認め、之をエホバの位置におき、そして絶對者として仰がねばならぬと論じ、又一般の神社に對し、祖先に對しても齊しく宗教的に崇敬すべきを獎勵するのであるが、我國家道徳涵養の考察としては兎も角、茲に我々の尤も要求する活ける宗教的權威並に要素を見出すことは至難なことである。

また或教育家は畏敬の必要を論じて、我等道徳上の一大病根は、或絶對の權威者を認めて之に畏服することを知らないためである。そしてそが權威者は實に我自らなり。我等が自覺したる我等自身そのものなりといつてゐるが、我々は舊神學のやうに徹頭徹尾人間の墮落性を信する者ではないが、しかも一體自分が自分の絶對權威者となることが能るであらうか。孔子すら「七十にして心の欲する所に従つて矩を踰えず」といつたではないか。またプラトールが哲學か、哲學がプラトールかと云はれた程の

プラトーンすら、一生の間、一度や、二度は死に當るほどの罪を心に抱いたこともあつたらうとは、モンテインの喝破する所ではないか。さはれ、道德上の權威を宇宙の至上者、實在者に仰がずして薄弱なる自分自身に恃む所に我國民道德の一大缺陷と一大病根とが横はつてゐる。我國民に所謂道德上の權威者なきがため、今日のやうに我儘勝手の振舞を來し、紛然擾然として狂態を演じてゐるのである。單に智識を以て理性を完ふし、倫理を以て徳性を全ふせんと欲するのは、恰も木に縁つて魚を求むると同一でそが實現の困難なるは謂ふまでもない。

最近歐米を視察して歸へられた澤柳博士の談片に斯ういふ言葉が見える。

或人は西洋にても宗教心が薄らいだ云ふが、我々の見る所必ずしも然うではない。現に米國の如き戰後教會や員の數が増してゐる、また信念にしても、バヤ燃え上つて而も近來は社會的に活動しつゝあるを見るのである。私は近頃ワイルソンの傳記をよんで感じたことであるが、彼らの政治意見なり、運動なり、悉く神意を畏み、其旨を奉ぜんためであつて、其演説の如きも、むしろ説教さへふべくして、中に「神のプロピデンス」(攝理)を説き正義人道を論じ、少くも敬虔の念に充ちた道德演説であつて。我國などの所謂政治演説

は丸で其品を異にしてゐる。有名なフライアンの演説などを見ても堂々たる道德論であつて神秘的の點が餘なくない云々

かくの如き觀察は、多くの歐米漫遊者の中、群を抜ける方にて自分も益し、また人をも益する所あるべきを疑はぬ。是れまでの歐米視察者は多く外部に現はれた方面のみに注意して、内面の方面を閑却せる憾みありしが、精神的方面に、より多くの觀察を遂げてこそ、その甲斐ありと謂ふべきであらう。

また中等教育に多大の希望と興味とを以て其任に當つて居らるゝ遠藤隆吉博士は最近の『道』紙上に『我國教育界の缺點』と題して荒涼たる我國教育界の現状を叙し、今日の學校は無色透明の智識を授け一字一句苟もせざるの標準を示し、所謂實驗經驗之を試験管の中に入れて衆人の諒解をうるが如きとのみを教へてゐる。けれども是れが即ち有限の範圍に屬したことである。人間は其の本性に於て此の如き生活状態を以て満足することの出来るものでない。人間といふものは學校教育が目標として居る

様のものでないことは明かである。

「さりて私に在の宗教を取り來つて之を學校教育に施せよは言はない。唯もそつと信念的情調が、育の中に這入つて來なければ完全なる人間にはなれないと思ふのである。今日の教育は科學萬能主義である。感情或は意志を口にするけれども其の實際を見れば殆んど科學の奴隸たるに過ぎない。これ丈で人間の、能は満足せらるゝものでない。上は天國、貫き下は地軸、穿つ底の信念的情調を含むにあらざれば、學校教育は到る處荒廢たるも、人間を圓滿に發達せしむる所以でないと思ふ。私は學校、従來の學校教育、以上に信念的情調を入れる様にすることが、今後教育の取るべき方針だと思ふ。」

と云つて吾人の言はんと欲する所を道破されたが、實際今日我國の教育界に於て情意の教育を缺き、信念的情調を缺きて、内面の生活を閑却しつゝあることは、洵に憂ふべき現象なりとする。此方面が充實さるゝに非ざれば、我國民の圓滿なる發展の容易に期待しがたい次第は謂ふ迄もない。

かくて地の光たるべき使命を有する吾人の責任は益々重且つ大なることを感せずには居られない。以下敬虔の工夫に關して何等か讀者に暗示を與ふるものあるべきを期

待し、ジエ、エフ、クラークの『敬虔の四種』を抄譯する。

一、敬虔の第一種は情緒的敬虔である。此種の敬虔といふのにも禮典的敬虔と同交的敬虔との二種がある。前者は禮典を通して與へられたる神の恩寵によつて信仰に生きるのである。かゝる顯象は大禮典教會に於て屢々見受けらるゝ所である。其處には儀式や、祝祭や、禮拜式や、そして其他の禮拜などによつて顯著となつた聖歌に加はることから起る最と嚴肅なる愉快さが存するのである。此處には喧噪な、そして利害關係を遣れ、一向に祈禱と讚美との裡に透入し、天の門とも見らるゝ神の家に入る時のみ感せらるゝ眞摯な慰藉と平安とが在る。由來大人格者、善人、聖者、殉教者の多くが是等の儀式によりて育まれ、またそが嚴肅なる影響によりて地より天に擧げられたることを思ふべきである。即ち想像は莊重なる宗教的建築や、按手式や、神聖なる音楽や群がれる禮拜者などによつて高尚にせらるる。もしもかゝる念を起し得ないものがあるなら、其の人は何等か人間的情操に缺如してゐる所があると謂はねばなら

ぬのである。も一つの敬虔の形といふのは群集によつて顯はるゝ同交的情緒である。之は信仰復興とか、屋外運動とか、また社交的宗教集會の際などに起されるもので、彌次に來た者が、反つて残つて祈るに至るといふことも度々あることなのである。神が禮典教會(ローマ教會及びアングリカン教會を指す)の嚴肅なる儀式に於て近くに在すと感ぜらるゝごとく、また神は熱情ある禮拜者の群を通して燃ゆる火の中にも現前し給ふと感ぜらるる。双方の場合に於て、先づ神は我々より遠く在し給はず、また我々は神の子供であり、従つて天の父の愛を解するやうに造られてゐるご多くの者は感知する。かくて人々は心を盡して神を愛することを學びうるのである。

二、個人的救ひによる敬虔 即ち第二種の敬虔は自分が罪を赦されたといふ念から來る所のそれである。救ひを齎らす神の御恩寵は、大なる感化力を有し、曾て大なる効果を成したのである。是は常に禮典的敬虔と同交的敬虔とに相伴ひ來つてはゐるが、殊に宗教改革をなせる『プロテスタント』の大原因として酷だ顯著なものとなつたの

である。一方禮典的及び感情的教會||羅馬教會、監督教會並にメソヂスト教會||はそれが公會共同禮拜に於て、銘々に啓示された神の現前とその愛を發見するに當り、他方カルヴァイン派は獨り闘い、悶え、かつ祈りて個々の心靈の救ひのために與へられる神の赦し給ふ愛の意義を受くるのである。かゝる苦悶に際しては、人は自分一人で千里獨往の感を懷き、唯だ自分の良心と神と共に在るのみである。彼は自から自己のために救ひの途を尋思し、そして罪と過失とから救ひ贖はれたることに對して深刻な感謝の念を以て神を愛するに臻るのである。彼は全心を舉げて神を愛する。何故なれば、失望と死とより神が救ひ給ふたからである。

三、理性の敬虔。是れが第三種の敬虔である。即ち神の測り知りがたい甚深な至仁、至善を創造の神秘の中に體驗し、そして萬有は彼より出で、彼を通して來り彼の物であるご會得して、衷心より神を愛することは是れである。此森嚴な念がミルトンの崇高な歌や、ポープの普遍的祈禱や、ウオーヅウオースの嚴肅な『リタニイー』や、ホイ

ツテイヤーの物やさしい詩歌などに神々しい或物を鼓吹した秘義なのである。

スウエデンボルグは心情を傾けて神を愛し、總ての物に神在すと思惟し、そして自然並に生命は神の顯現であると思惟した人であつたのである。シユライエルマヘルが『神に酔へる人』と呼んだ所のスピノザも亦かゝる人の仲間であつた。往古ギリシヤ境に居りながら、しかも終日終夜、神を思ひつゝ生活したのであつた。往古ギリシヤ人の中にあつては、プラトーンのごときが此類で、そが宏大な宗教的感化は、今日に至るまで、眞面目な思想家達の間認めらるゝのである。かゝる人々は衷心から神を敬仰し、憧憬したのである。そして神の恩は彼等銘々の思想を通して溢れたのである。兎角宗教とは縁遠いものと思はれた科學も亦今日では宗教的ならんとしてゐるのである。科學其自身は宇宙の普遍的法則の問題に關して神の創造手段を使用する。相關聯せざる事實の觀察から更に何に因りて、また如何にして此關係を有するやとの一層大なる思索に進んで來たのは近代の方法である。

我々は已に神の恩寵の顯はるる方法を考へた。之を換言すれば、敬虔の念の生ずる三つの方法を認めたのである。即ち第一の物は、禮典と教會との仲立によつて起る神の現前感に依る敬虔と宗教的集會の同交によつて感激するそれとである。第二のそれはイエスの十字架によりて表はれた天父無限の愛の感化にして、そしてそが愛が我々人類の汚れた惡しき魂を清め、贖い、かつ強むる神秘な力を有する神の力に依る敬虔である。そして第三の敬虔は、則ち宗教的情調と理智的考察とに因由するところの天父に關する體驗的認識によるそれである。

x

x

x

x

上叙の外、更に神の愛にすゝみ入る途はないものであらうか。二六時中、世務や、俗事などに没頭しつゝも、尙ほ宗教的生活を離るゝことを氣遣い、神を見上げ奉りて之に奉仕せんと欲する實務家も亦、神の愛の中にすゝみ入り得るやうな方法はないであらうか。蓋し世の中には、前述のやうな方法では敬虔になれない少なくとも、敬虔

願くは敬虔の民たれ

な美風良俗を涵養し得ない人々が多く存在してゐる。彼等は儀式を喜ばぬ。また儀式的宗教にも興味をもたぬ人々である。また彼らは神と人との感應同交的の宗教をも信せず、そしてリバイバル的の集會にも用がない。唯だ自分獨り頑然として動かす、他の刺戟や、感情などにも動かされない。又基督教をば各人銘々の魂の救ひであり、罪より赦さるる贖ひでありとする人々の大切な經驗に入らうともしない。而も彼等は常に正しきを成さんと務むる自覺せる人々である。彼等はたしかに誤つたことがあるなら之を爲たといふ事を認むる、そして之れを残念に思ひ、かつ自分等を害ふた人々を自分等が恕しむやうに、神も亦自分等を赦し給ふと信するに違ひない。さり乍ら彼等は神や、義務や、靈魂不滅などの大問題について沈思黙想に時を費やすやうな宗教的思索家でもない。彼等は一向に此世の中の仕事に勵んでゐる。かかる人々の有し得らるる何等かの敬虔がないであらうか。又た彼等は是れ迄通りに彼等が爲す所、行ふ事の中に不知不知して現はるる神の愛に根ざせる靈感や、歡喜などを閑却して依然教外

の人として働かしめておくべきであらうか。我々の大に考察を要する問題であらねばならぬ。

働き(Work)から来る敬虔

我々は尙ほ他に一つの途があつて之が人々に神の愛を宣傳する方法と思惟する。即ち働くこと、奉仕することも亦形式の異なる一つの禮典となつて天父の恩寵を周囲の人々に分け得らると信する。愛を抱く者は與ふる。愛は働といふ手段を通して深く心靈に喰ひ込み、そして責任は敬虔に達する途となりて我々が日々の職務に従ふ間も神に導かれ、且つ單に道德と呼ぶる所のものも、おのづから内面的精神生活への道となりうるものである。

かくして救を齎らす神の恩寵は他の人々に奉仕せんと苦心する人々に來るのである。働かんと欲する者は祈らざるを得ない。我々は義務として祈るのではない。感情として祈るのではない、また自己の救のためでもなければ、智的敬虔からでもないが

我々は自分が他人に對する特權を完ふするために神の大なる助けを要求するからである。固より祈禱なくして遂行し得らるる仕事もある。即ち單なる機械的の仕事や、日々定りきつた仕事などは手だけでも澤山である。さり乍ら他人を助くる爲に働かんとする場合、若くは如何にして助けうべきか了解に苦しむ際、將た何かしてやらねばならぬのだが、どうも適當に實行し得ない時などが起ると、我々は神の助に頼らねばならない。『父よ、我になすべき道を示したまへ』と祈る時、何かしら確かな、しかも神秘にして容易に知ることの能きない攝理によつて途は開かれ、助けは顯はるる。そこで信仰は奉仕に入るの途で、奉仕は信仰に到達する道となりうる。

かかる形狀は敬虔の一樣式であり、また基督教の表現である。即ち一禮典としての働きから來る敬虔であり義務の宗教的形式である。かるが故に或點に於て、働から來る敬虔は教會の感情的敬虔よりも、リバイバル的集會の情緒的敬虔よりも、或種の救靈的敬虔よりも、將た宗教思索家の智的敬虔よりも於高く、於強く、於深く、更に徹

底的であると思惟せらるるのである。之れは全力を擧げて神を愛することである。何等か眞劍になつて基督教の事業に關はる時には、是非共此の敬虔を要するのである。通俗な一例を取つて見たい。假りに日曜學校を教ふる若き姉妹が兒童等を導くに當り單に彼等に向つて聖書の學課を繰り返すのみでなく、眞に彼等を神に向はしめんと欲する。即ち或物を彼等の心の中に植え付けやうと力むる。そしてどうしたらかかる大業を完ふすることが出來やうかと考ふる時、自分は全然此の働きに適しないと感じて失望し、そして之を斷念しやうとすることも有りさうなところである。しかし乍ら我々が基督のため他人のため善を爲さんとする秋、衷情から求めさへすれば、或力が來るといふことを彼女が確信するに至つたらさうであらうか。彼女は其の使命を放擲することなくして、彼女は神に熱き祈りを捧ぐるやうになるであらう。そして此願が常にきかるるといふ確信が生ずれば、則ち信仰も勇氣も、百倍して進みうるに至るであらう。

更に貧しき友や、細民窟などを訪れる者について考へて見るがよい。此事たる容易なものではない。彼等の後援者としてでなく、眞に友として、また職掌柄としてでなく、兄弟、姉妹として行き、眞にかゝる感じを懐かしめ、そして彼等の心情に信仰と希望と歡喜と勇氣とを植えつけんとするに當り、誰でも自分一人の微力で之をなし得ないことを覺ふるのであらう。左り乍ら自然界の法則と等しく精神界にも亦そが法則があつて、その法則が我々に善を爲さしむるのである。即ちそが法則は祈禱の上に應驗さるのである。此理を解して人生には祈りによらずしては與へられない所の或力を我々に與ふる尊い者が在ると信するならば、かかる際、我々は一層信仰と勇氣とを鼓舞していかなる難事にも當らんとする氣象が起つて來るのである。

誰かが恐ろしい惱みに陥つてゐると假定する。我々は『レビ族』のやうに、其人を見て見ぬ振りをすることがありはしないであらうか。時として我々は云ふ『さうしたら良いだらう、自分自身には何も出來ぬ』と。しかし乍ら神が確に我々に力を添へて

適はしき態度に立たしめ、そして悲める、惱める、傷つける心に上よりの生命と慰安とを注ぎ得るやうになさしめ給ふと信する時、我々は直に欣然として進みゆきうる。即ち全能者の御手に任せて進みうるのである。

一般に牧者、傳道者は屢々死に瀕する者、或は子を失つた人々のところに招かる。かかる場合、慰めの言葉に窮しはしないか、躊躇することもあらう。が、今は言ふべきこと、爲すべきことは與へらるるを知つてゐる。我々は主の約束を信じて其言葉に頼るべきである『如何に何を言はんと思ひ煩ふ勿れ、其時言べきことは爾曹に賜るべし、もしなんぢら何事にても我名に託て求めば、我これを行ん、求よ。然ば受ん、而して爾曹の喜び満べし』即ち基督の名に於て願ふとき、すべての物を神は與へ給ふと約束されたのである。謂ふ迄もなく我名に於て願ふとは、單に基督の御名を用ふるさといふ意味ではない。之は我々が基督の精神で願ふことなのである。我々が他に善行をなさんとする場合、我々の心は全く基督の心の中に宿るのである。かるが故に

他を助くるために力を求むるとき、真に基督の御名に於て祈るのである。かくして要する物を求むるとき、與へらるることは確實である。かかる際、或力ある信仰と愛と智慧とが與へられ、我々をして容易に他を助け得さしめらるるのである。

x

x

x

x

要するに敬虔は種々なる方面を通して現はる。或は教會に於ける崇高な道念に依り、或は禮典に依れる情調の中に、或は罪の赦しの念に於て、將た宇宙の莊嚴なるに目醒むる理智に於て、おのづから我々に敬虔は齎さるゝのである。そして今一つの敬虔は奉仕より生れ、働より向上する。かかる場合、奉仕は一の禮典となり、宗教となりて我々を神の愛に至らしむる力となつて表はる。いづれの敬虔を是とし非とするかは出来ない。いづれも我々を驅つて神前に近づかしめ、そして我々の生活を變化せしめ、美化せしめ、聖化せしむる秘義となるのである。しかもエルサレム城外、ベテスダ池頭の病める者の中にイエスの敬虔な態度が活躍せるごとく現代のベテスダ池頭に立つて愛と善とを傾倒する敬虔は現代の要求に應ずる一方法たらずんばあらずとする即ち至誠赤心を以て他に奉仕せんとして力を求むる祈に於て、そして之より顯はる、働きに於て、體驗の敬虔、行爲の敬虔を認めうべしとするのである。

人生の理想

曾てエマソンが偉人を論ずる一節に「國民の初期は個人の初期と同じく自分のしらの力をもつてゐる時代である。成人しても理解力の鈍い間は粗野な言語を弄する。教育をうけて稍や事物が明瞭になつて来る。もし人間の舌が發音談話しうる構造になつて居なかつたならば、人間は今猶ほ森林中の一禽獸であるのであらう」といつて居るが人間は有史以來既に數千載を歴ても、まだ實際泣いたり、叫んだり、地團太をふんだり、そして放蕩したり、争鬪したり、罵詈したり仕合うてゐて何時天國の實現を認むることをうべきか、浩歎の至りにたへぬのである。もし現實世界を有りのまゝに見るのみに止りて、更に一步を進めて理想世界の幻象を仰ぐ底の靈眼を缺く場合、所謂理想即ち宇宙の大法を尊ぶ心微つせば、人間は依然として一野獸たり、罪の子たる境遇を脱し得ぬであらう。

此に於て吾人は國家、社會及個人に於て其生活を向上せしむべき理想若くは信仰の酷だ必要を感じる。殊に國家の單位となつて居る個人の生活に於て最大急務なるを感ずるのである。曾てイスラエルの智者は『黙示なければ民は放肆にす、律法を守るものは福なり』と唱へたが、たしかに知言と謂ふべきである。實際何等黙示や、幻象や、理想や、信條などのない國民の生活は、人生に對して極めて冷淡で、放肆で、そして無理解である。かゝる生活は所謂醉生夢死の生活であつて世界の文化史上に何等の印痕を留めない無意義な存在に終つて仕舞ふ。

由來クリスチャンは人生に對する強烈な憧憬と確乎不動の信條を有する理想主義者である。そして此の理想は常に吾人に若やぎの心を與へる。此の若やぎの心を把握する者は今日の世界よりも、明日の世界に住み、現實の我よりも、生まるべき理想の我に生きて居る。若やぎの心を有する人は此の舊き、醜き世界より新しき、美はしき理想の實現に轉化せんことに努力するのである。

吾人の所謂る若やぎの心を有するものは、たゞひ形式の上に何等かの詩を歌はざるも、眞個に一種の詩人である。又たさひ手に鑿子を取らざるも、正に一個の藝術家である。又たとひ自ら或樂譜を造らざるも、一個の音樂者である。かるが故に彼の心にはいかなる時と場合に拘はらず、常に幻象を有し、そして一事一物の上に意義と理想を認むる。彼は又たさひ其信條に於て簡潔に失し、よしんば其形式に於て定まらざる所あるも、しかも宗教其物に對して熱誠と衷情を傾ける。彼は神と基督と永遠の世界と愛と正義とを以て世界を創造する所の至要分子なりと信するが故に、叙上の要素は彼に酷だ近く存する者かつ實在と見ゆるのである。かくて彼は理想の中に生き、理想の上に動き、理想の爲に努力する。

凡そ國家と個人とを問はず、吾人の眼前には二様の形式が横はつてゐる。即ち一はすゝんで新哲學を追求するのと、他は遡つて舊歴史を回顧するのとの傾向である。そして前者はどこ迄も進歩的、積極的、擴充的生活であるのに反して後者は動もするこ